DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
悪堕研究機構 悪堕ち合同2
悪堕ち合同誌
悪堕ち
ファンブック
2B
―悪堕研究機構―

目次

緒嵜	p. 4 - 7
あおさきけい	p. 8 - 14
浪花道またたび	p. 15 - 16
いなづまこと/常時紅蓮	p. 17 - 26
投職	p. 27 - 31
ak	p. 32 - 35
魔法屋	p. 36 - 39
波多野奈津目	p. 40 - 45
八月一日冬至	p. 46 - 49
離宮	p. 50 - 53
辰鵜	p. 54 - 55
mio	p. 56 - 62
ぐっちー	p. 63 - 64
サッカリン秋月	p. 65 - 72
なまはぐれ	p. 73 - 74
浪花道またたび	p. 75 - 76
つー	p. 77 - 83
ぱら☆ろす	p. 84 - 87

表紙・裏表紙・目次・奥付イラスト：緒嵜

編集加工・タイトルロゴ：緋風

くッ…！
奴らが我々の研究に目を付けていたことは知っていたがこんな凶行に走るとは……！

ギ…

研究所の防衛システムも破壊されてしまったようです

ここは私が死守致しますので博士たちは逃げてください

ギギ…

現在の私の武装でも足止め程度なら可能かと

馬鹿言えっ！
キミだけを置いて行けるわけないだろう!?

キミがいなくなったら私は―

博士

貴女さえ生きてくれていれば私の代わりは造れます

貴女は生きのびてそして実現してください

人だけでなく道具として扱われてきたアンドロイドも等しく幸せになれる

貴女と―そしてアンドロイドである私も夢見た素晴らしい世界を

くそッ…!!

奴らの襲撃から一か月…まだあの子の無事が確認できないとは…!!

奴らはロボットを軍事や性産業用に違法改造し高値で売り捌くことを生業としており目的の為なら武力行使も辞さない犯罪組織だ

その中核を担うのは金に目が眩み外道に堕ちた研究者連中…かつては我々の同志だった者でもある

ロボットを金を生む道具としてしか見ない奴らとロボットの可能性を追求する我々は常にいがみ合っていた

あの襲撃で研究所は全壊—研究資料や成果の多くも奴らの手に渡っただろう

そしてその研究成果の中には恐らく『あの子』も—

—代わりを造ればいいなどと…簡単に言ってくれるなよ

ギリッ

あの子は「人の感情」を学習させることで人間と同等の自意識(アイデンティティ)を持たせることを目的として製造されたアンドロイドだった

だが…今の私にとって彼女は最早いち研究対象では無くなっていた

そう……たくさんの感情を覚えてもらうため我が子のように接した大切な—

—博士!!

研究所を襲った組織から博士宛てに動画が送られて来たのですが

その動画内で行方が判らなくなっていた例のアンドロイドの姿が…

なんだと!? あの子は無事なのか…!?

それが…姿自体は確認できたものの無事というには……

あの子の現状が判るのなら何でもいい!

とにかく見せてくれ!

な—

ーいやはや
まさかアンドロイドに
これほど人に近い感情を
再現させるとは恐れ入った

貴女はまごうことなき天才だ
誇りたまえよ、博士

こんな素晴らしい
『モノ』を見せつけられては
今まで機械風情に感情など
不要と謳ってきた我々も
考えを改めざるを得ないよ

…なァ？
お前もそう思うだろう？

はぁいっ♥
その通りでございます
ご主人様♥

こうやって
人間に奉仕する『悦び』を
知れたのも精巧な疑似感情
プログラムを作り
育ててくれた博士のおかげ
でもありますからね♪

でも……
この幸せを教えてくださった
だけでなく思考（アルゴリズム）と躰（ボディ）まで
性処理奴隷（セクサロイド）として適したものに
変えてくださったご主人様への
感謝とは比べるまでもありません♥

はは ッ!!
やはり奴隷にも
主人を想う心『だけ』は
必要だなァッ！

我々人間が『使う側』で
あることをより認識できる！
お前は人の心まで満たせる
最高の『道具』だよ!!

ーキミにはこれから
人が持つ色々な
感情を覚えてもらう

まずは…そうだな
『喜び』という感情を
教えよう

人が持つ感情の
中でも特に尊く
素晴らしい感情だ！

楽しみだな…
この感情を覚えたキミと
笑いあえる日が

—違うんだ

キミに知って
もらいたかったのは
こんなことじゃ…ッ！

ーというわけで博士
貴女の研究は私と
ご主人様が有効に
利用させて頂きます♥

製造主である人間に
使って頂くことこそが
私たちの存在意義であり
悦びなんです

だからこの悦びを—
このシアワセを
他の子たちにも
感じてもらえるように
したいんですよ

貴女が私にくれた
『人間相当の感情』と
ご主人様がくださった
『道具としての思考』

それらをパッケージングし
『布教』させることで…ね

『人もアンドロイドも
シアワセになれる世界』

私たちが人間に
造られた存在である以上
対等な関係になど
なり得ないでしょう

これこそが互いの
立場を弁えた理想の
『シアワセ』の形だと
は思いませんか？

貴女が目指す独り善がりの
理想の世界とやらの為に
精々頑張ってくださいね

私もご主人様の下で
『嗤いながら』
見守っていますよ

プ

ッ

ッ

—博士♥

戦艦皇因幡の白黒堕天

あおさきけい

『――かつて我が国の祖先はこの国を古の時から護り続けてきた皇族を廃止するという愚を犯し、その結果我が国は大きく乱れ国力を落とし、世界中から蔑まれ長い没落の時を過ごすこととなりました。その国難の中に天啓の如く御光臨なされた、かつての皇族が信仰する神の血筋を引き継がれる「皇神様（すめかみさま）」の御力によって為された「皇革命」によって現在の「日本皇国」が成立して今日で百年、今日では我が日本皇国は皇神様の素晴らしき神通力と卓越した論理的な国家運営術によって、世界を率い人民に平和と豊かさと幸福をもたらす先進的な国家として君臨するに至りました』

ここは日本皇国の首都・東京。世界最大の大都市の中心を大きく陣取る国家元首・皇神様の棲家である皇神殿前の巨大な通り、通称『観閲通り』には多くの市民が詰めかけ、陸海空軍の軍人と最新鋭装備が広大な道路を整然と練り歩く姿、さらには通り沿いに並べられた巨大モニターに映し出される皇神様の姿、それに合わせてアナウンサーの口から伝えられる市民に向けての言葉に市民の誰もが国旗を振り、熱狂した姿を見せていた。

今日は皇革命記念日。日本皇国にとって最も祝うべき記念日であった。

『そんな素晴らしき我が国に、さらには世界中へ今新たなる災いが降りかかりつつあります。我が国が世界へ平和をもたらすまで繰り返された数多もの戦いにより海へ沈んだ艦船の中に眠る、無数の負の魂を核にして産まれるとされる古の人類が産み落とした海から現れる災い、『艦獣』です。人類のみの力ではまるで歯が立たない災いを前に、人類は破滅への秒読みさえ覚悟しました。しかし、そのような災いにさえ、皇神様は救いの手立てをお持ちになられていたのですッ！』

そこで沿道に流れる音楽がより荘厳な物へ変わり、市民の興奮がさらに高まる。興奮のボルテージが最高潮に達した通りに姿を現したもの、それは。

「戦艦皇（せんかんこう）さまぁぁぁぁぁぁぁッ！」

我が国古来からの巫女装束のような意匠を取り入れつつも非常に現代的なボディスーツのような衣装を纏い、その背中に本来なら軍艦に積まれているのが正しいであろう何門もの主砲のような武器が付いた巨大な機械の塊を背負う、うら若き少女たち。

人呼んで『戦艦皇』たちの姿であった。

『皇神様がその神通力によってこの国を古より支えた名家の血筋から選び抜かれ、百年前の皇革命実現に貢献した後の皇海軍所属となった戦艦の遺物を核とした兵器「戦皇具」を纏い戦う彼女たち「戦艦皇」こそが、艦獣を「鎮滅」できる世界唯一の存在であり、我が国の、いえこの世界を遍く災いから救う救世主となるのですッ！　最早説明は不要でしょうが、その選ばれし「戦艦皇」たちをここにご紹介いたしましょうッ！　まず先頭を進みますは、戦艦皇「信濃」ッ――』

アナウンサーの声は今まで以上に力が入り、兵士や装備のパレード以上に前後の間隔を空け練り歩く彼女たちへ、市民からの歓声と眼差しもまた最高潮へ達していく。

ひとり、ふたりと戦艦皇たちが通り過ぎ、順番が十二番目に達するのをその目で確かめると、『彼女』はその豊満な胸を覆う白地に赤の挿し色が入った巫女装束のようなボディスーツで覆い、巨大な砲塔を背負った流麗な肢体を滑らかに行進させ始めた。

『さぁッ！　十二名の戦艦皇艦隊行進の殿を務めますのはッ！　皇革命を成功させる原動力となった『艦内皇革命』を成功させ国民なら誰もが知る皇海軍の超戦艦『因幡』の遺物を核とした戦皇具を纏う「戦艦皇因幡」でございますッ！　十二名の中で現在最も多くの艦獣を鎮滅し数多の命を救った「日本皇国の誉」と名高いその麗しく勇ましい姿へ、惜しみない拍手と喝采をお送りくださいッ！』

「因幡様ぁぁぁぁぁッ！」

「あの時は……、あの時は命を救って頂き、本当にありがとうございましたッ！」

「期待しておりますよぉぉぉぉぉッ！」

沿道から無数に投げかけられる最高潮に達した歓声と熱い眼差しを一身に受けると、刹那吹いた風に靡く腰まで届く艶やかな黒髪に指を通し整えた彼女は淑やかに手を振り、臨界点

に達した市民の想いに応えつつ行進を続ける。
そんな彼女が左右満遍なく向ける紅い瞳から注がれる視線の中に、通りにいくつも設置された巨大な画面が飛び込んでくる。
そこに映し出された一枚の写真。それは皇神様の御前で跪く彼女の姿。『戦艦皇因幡』の任を拝命した儀式の様子を捉えた写真であった。
「私にこれだけ多くの人たちが、そして何よりも皇神様が期待を掛けて下さっている……。この期待に応えるためにも、もっと、もっと己を磨き強くならねばなりませんわね。この国を、この世界を、守れるのは私たち、戦艦皇だけなのですもの」
彼女はひとりそう決意の言葉を零しつつ、どこまでも人垣で埋め尽くされた通りを颯爽と歩き続けていく。
彼女の名前は近衛（このえ）　小兎姫（ことひめ）。古から国とその元首を守ることを生業として来た名家・近衛家から見いだされた『救世主』であり。
そして、戦皇具を扱えるということ以外はごく普通の、儚くうら若き乙女なのであった。

◇

――ジワッ、ジュブジュブジュブッ。
――なに、これ……？
先をも見通せない暗転した世界の中で、私の、『戦艦皇因幡』の、幾多もの穢れを跳ねのけてきた純白の装束であり防具である『皇護装』が、まるで毒にでも侵されていくかのように黒く、黒く染まり禍々しく艶めかしい光沢を帯びていく。さらに、
『ショクシュ……、チンポ……。触シュ、チンポォ♡　触手ぅ♡　おチンポォ♡』
頭の中にじわりじわりと広がっていく、これまで口にさえしたことがないような下品で悍ましい言葉。そして、
うじゅる、うじゅるじゅるじゅる……ッ！
いつの間にか自身の背後にいた肉塊と機械を組み合わせたかのような憎き艦獣の醜い姿から伸びる、四肢を絡め捕っていた赤黒い触手が一本、また一本と増えては絡みつき、私の身体中を犯し尽くしていく。
気持ち悪い。きもちわるい。キモチワルイ。
キモチイイ……♡
犯されるという行為から決して我々戦艦皇が抱いてはいけない感情が言語となって表現された刹那。
ぐぐぐぐっ……、ブルンッ！
未知なる電のような感覚が身体を貫き、世界が白く飛んでいく。白飛びした世界が元に戻っていくとそこには、
「――――え？」
見慣れた街の情景、逃げ惑う人々、そして……。
「――いや、イヤッ……！」
腰を抜かしながら必死に後ずさる、年端もいかない少女と、
『オカシタイ……、おかしたい……、犯したい♡』
その少女に自身が突き付ける、乙女の体に存在してはならない、赤黒く禍々しい肉棒。
「――――ハッ？！」
気が付けば、そこは見慣れた自身の寝室の布団の上。
「私、どうしてこのような悍ましい夢を……」
滝のような脂汗によって肌に張り付いた寝間着の感覚に不快感を覚えつつ、私はよろよろと布団を出ると、着替えを取りに鎮座する巨大な桐箪笥の前に立った。
一週間ほど前、私はこれまでの中でも特に強い艦獣を鎮滅してみせた。しかし、艦獣の触手に絡め捕られ捕食されそうになるなど苦戦を強いられ、倒した時にはその肢体は艦獣の体液に塗れ、相討ちスレスレといった際どい結末を迎えていた。それ以降、眠りにつくと先ほどのような悍ましい夢を見る機会が増え、その解像度も不気味なほどに高くなっていたのだった。
「私……、大丈夫、かしら……」
思わず不安な独り言が零れる。その言葉はいつまでも、いつまでも心をざわつかせ、ぐるぐると回り続けるのだった。
「――まぁ、そのような夢を」
数日後、私はついに連日見る夢に耐え切れなくなり、恥を忍んである大切な人に事の次第を打ち明けることにしたのだった。
彼女の名前は鷹司（たかつかさ）　小春（こはる）。私たち近衛家の分家である鷹司家の娘であり、私の戦皇具・因

幡の整備や調律全てを担う戦皇具専属調律師であり、そして……、密かに私の禁断の初恋を捧げた、唯一心を開ける存在。

「――ねぇ小春。私、このまま戦艦皇を続けても……、いいのかしら？」

普段は誰にも、いえ、彼女の前だからこそ出せなかった弱音が、不意に口から零れ落ちていく。

「――やっと、弱音を口にしてくれました」

私の不意の弱音に対する彼女からの回答は、意外な言葉だった。

「今まで嫌になることばかりだったはずなのに、小兎姫はいつも『大丈夫』しか言わないもの。そんな言葉、実は待っていたのですよ？」

「小春……」

言外に伝わる『私をもっと頼って』という想いを、私はようやく受け入れられるような気がしていた。

「そんなお疲れな小兎姫に、はい♪　鷹司家秘伝の疲労軽減の漢方薬よ」

「――ありがとう、小春」

「無理しないでね、小兎姫」

古風な包みに入った薬を受け取り眺める。漢方の知識もある彼女には何度もその薬学によって助けられてきた。今回もきっと――。

『メスブタ……、オマンコ……、ショクシュチンポ……♡　メス豚……、オマンコ……、触シュチンポ……♡　牝豚♡　オマンコ♡　触手チンポ♡』

今夜も私の中に、また悍ましい言葉が群れを成して蠢く。

私を貪り覆いつくす触手の群れ。触手が群がりさらに太さを増す悍ましき肉棒。その触手に絡め捕られているのは、先日艦獣から助けた少女？　そして、

「さァ、皇神様ノ本当の願イを叶エまシょう♡」

触手を操り、私と触手を介してまぐわおうとする艦獣……、いや……、もしかして、小春……？

「――――ハッ！？」

気が付けば、そこは明け方の自身の寝室の布団の上。

「また……」

額の脂汗を拭いつつ、私は体を起こした。

小春に例の漢方薬をもらって以降、確かに寝れば疲労は取れ、艦獣と戦う身体も軽くなっているのを感じていた。

しかしあの淫らな夢だけは消えないどころかさらに鮮明さと狂気を増していく一方だった。

「大丈夫……、小春がくれたお薬だから、小春がくれた……」

あの夢のことを考えれば考えるほどあの時の小春の笑顔が脳裏を過り、私は結局この夢のことを再び打ち明けることも、薬を飲むのをやめることも、できずにいたのだった。

「――小春、連絡も取れないなんてどうしたのかしら」

あれから暫しの時が流れ、私は戦艦皇因幡として輸送機の中で空挺用拘束具に戦皇具ごと身体を繋がれた状態で待機していた。いつもならいかなる時も出撃を見送ってくれた小春は、その数日前に「どうしても行かなければいけない場所がある」と言い残し、めったにない外出へと出たきり戻ることはなかった。

「――因幡ッ！　何ボヤっとしてるの！　出るわよッ！」

不意に耳朶を打った同じ輸送機から降下する戦艦皇『信濃』の声にハッとした直後、私の身体は輸送機の中を滑ると背後の扉から青く輝く海面目掛け中へ飛び出す。その海の上で蠢くひと際大きなどす黒い影。人類の敵、艦獣。それも過去最大級に大きな個体が。

『拘束具切離し各自散開ッ！　戦皇具の能力出し惜しみなし……、うわッ！』

既に展開して戦う他の戦艦皇たちに容赦なく繰り出される触手に殲滅光線。一瞬見ただけでわかる強さ。

（――強いッ）

その強さを再認識して改めて敵と向き合った直後、私は言葉を失った。

船と獣の合成体である艦獣の核に組み合わさる、人型。その人型は――。

「こ、はる……？」

よく知る名前が口から零れ出す。

「――因幡ッッッッ！」

近くにいた信濃の叫びが耳に届いた時には私の目の前はもう既に艦獣から放たれた極太

の触手が広げる赤黒い口に覆われ、私は成すすべなく戦皇具ごと一呑みにされてしまっていたのだった。

◇

『ショクシュ……、チンポ……。触シュ、チンポォ♡　触手ぅ♡　おチンポォ♡』

再び気が付いた時に私がまず知覚したのは、これまでに幾度となく夢の中で聞かされ続けてきた謎の声。続いて、

（息が――、できないッ！　はずなのに――）

口やお尻、さらには乙女として特に大切な場所まで、私の「中」へ押し入れそうなありとあらゆる場所に殺到する醜く赤黒いヌメヌメとした触手の群れ。そして最後に、

（気持ち悪いはずなのに……、キモ、ちイイ……？）

喉元から、お尻から、そして秘部から伝わってくる嫌悪感の中に混じる、邪な快楽の気配。

「――マッテ、いましたヨ、戦艦皇因幡、いえ……、こ・と・ひ・め♪」

聴覚だけでなく、私の身体全体を貪る赤黒い触手からも伝わってくるその聞きなれているようで、それでいてどこか異質な声とともに、『ソレ』は姿を現した。私にまとわりつく触手の全てを束ねる、鉛色の肌をした人型が。

そう、私の大切な、小春の姿形を真似た卑劣な化け物が。

「――私をッ、私をその名で呼ばないでッ！　私の、わたしの大切な人にしか許していないッ、お父様が付けてくださった大切な名を――」

「ソう、小兎姫という名前はあなたのご両親と、そしてあなたが社会的には認められない相手へ抱く想い、そう恋心を抱いている相手にだけ呼ぶことを許している大切な名前。なら、あなたの恋心を受け止める私は、いつものようにそう呼んでも、何も可笑しくありませんよネ？」

ぞわッ♡　ぞわぞわぞわッ♡

小春の姿形をした人型がその相貌を、人間が笑顔と評する形に変えた直後、私の全身を犯す触手から悪寒とも快楽ともとれる未知なる感覚とともに、ひとつの『記憶』が流れ込む。

小春の部屋、幼い小春の姿、ふとした瞬間に躓き大きくなっていく小春の姿。小春の懐に飛び込んでしまい、小春を押し倒し、直後触れ合った小春と、私の唇。そこから伝わってくる小春の優しい体温と、温もりよりも速く伝わってきた甘く切なくて、そして狂おしいほどに気持ちのいい感触。

「わ、私は今、な？　なぜこの記憶を……？　この事は私と、こは――」

そこまで口にしたところで私の口がひとりでに言葉を紡ぐのを止めてしまった。今の記憶を事細かに知っているのはふたりだけ。躓いてしまったこの私と、その私が押し倒して、彼女の唇を奪ってしまった――。

「わかってもらえましたカ？　小兎姫♡」

「――小春を利用するだなんて、艦獣の卑劣さには、今日こそ本当に……、あひッ♡♡！」

艦獣への怒りの感情が心の奥底からふつふつと沸き上がった次の瞬間、三度私を犯す触手から電撃のように伝わってきたのは身を焦がすほどの快楽と、

「違うのよ小兎姫♡　利用されているのは私じゃなくて、あなたがこれまで必死になって倒してきた、か・ん・じゅ・う♡」

鉛色の肌をして、赤黒い触手の群れを操る愛しの小春の姿を『している』と思い込んできた、何かが紡ぐ言葉。

「な、なにを……、いっているの……？」

今突き付けられている言葉の意味を理解できない、否、理解したくない小兎姫が無意識のうちに首を横に振り、耳朶から侵入してくるその言葉を必死に振り払おうとする。

「いいノ♡　今はわからなくてもそのうちにあなたの身体が勝手に理解してくれますカラ♡　まずはひとつ謝らせてね♪　私、あなたにうそをついていたノ♡　いつもあなたが見ていた小春という人の姿は仮の姿。今ここにいる私が、あなたが恋心を抱いた相手の、本当のす・が・た♡」

そんな、そんなわけがない。

「違わないノ♡　私は、鷹司家が古より密かに夢想し、研究し、継承してきたある目的を成しえた末に生まれた存在なの♡　私の本当の名前は、小春じゃなくて獣神♡　この世界で暴れまわる艦獣を孕んで産み散らかすのが大好きで、鷹司家が、古より密かに信仰を続けてきた

神様の生まれ変わりが、わ・た・し♡」
　違う。鷹司家は私たち近衛家とともに、今この皇国を統べていらっしゃる皇神様を信仰し、忠誠を誓い、この国と皇神様の永平のために――ッ！
「その『信仰』を作ったのも、その信仰対象である皇神様という存在を作り出したのもわ・た・し♡　いいえ、正確には生まれ変わる前の神様の私ね♡　そして、皇神様が成し遂げたとされている皇革命も、その皇革命成功のきっかけとされている、皇神様が直々に成し遂げられたという『艦内皇革命』も、すべて手引きしていたのは私を生まれ変わらせてくれた鷹司家♡」
　私にまたも触手越しに流れ込んでくる、私の知らない光景。嵐の海の上、揺れる一隻の軍艦とそれを取り囲む幾隻もの他の軍艦の姿、その一隻の軍艦の影に絡みつくように暴れ狂う、私がこれまで倒してきた艦獣によく似た鉛色の影。その鉛色の影が呑み込もうとする軍艦の姿、それは――。
「そんな……、私は、私は一体何を――？」
「ソう、小兎姫なら、いいえ、『戦艦皇因幡』なら、皇国の国民の誰よりもよく知っている軍艦の『本当の姿』。日本皇国皇海軍が誇る誉れ高き超戦艦因幡、あなたが纏う戦皇具に埋め込まれた遺物が知る、『本当の歴史』」
　そんなはずがない。そんなはずがないのに、どうしてだろうか？　この流れ込んでくる記憶と、抽送によって触手から絶え間なく送り込まれ続ける快楽が混然一体となって、この記憶を――。
「皇族廃止によって堕落し、他国に新鋭戦艦とともに寝返ろうとした海軍軍人たちを武力そして類稀なる演説によって治め、逆に皇族が信仰していたとされてきた信仰対象の生まれ変わりであるとされる今の皇神様が統べる日本皇国を興すための皇海軍の援軍に加え率いたという、皇国国民、そして世界中に知られる『艦内皇革命』も全て私たちの作り話。あの時本当に行われていたのは、私と鷹司家出身の海軍軍人が行ったある計画。その名は――」
　そこで鉛色の小春が触手をぞろぞろと引き摺りながら私のそばまで近寄り、私の耳元にこうささやいた。
「『艦艇獣神化計画』。私たち鷹司家が求めていた獣神を生み出そうとして、でもその時は失敗しているノ。この国で一番強い超戦艦因幡に、獣神の因子を孕ませることまではできたけど、因子の暴走を制御できなくて結局一度封印する羽目になったのが、あの時の本当の歴史。そしてその失敗を基に一足先にこの世に再び生まれ変わらせてもらえたのガ、わ・た・し♡」
　そんなわけが？　あレ？　そんなハずが……？
「さっき『私は獣神』と名乗ったけれド、それも本当はちょっとだけウソ♡　本当ノ獣神は、ふたつがヒトつ、ふたつの獣が、交わり犯しあってようやくひとつ♡　そのもうヒトつの獣神は――♡」
　鉛色の小春が触手の一つを操り、私の背後に背負う戦皇具にじゅるじゅると絡みついていく。
「ほラ、ここに♡」
　直後、触手が絡みついた戦皇具の一部が軍艦らしい甲鉄色から、触手と同じ赤黒い色へと変質していく。
「そろソロ思い出し始めたかしら？　私たち獣神と、その私たちを古から奉り続けてくれた素晴らしい人間たちが望んでいた世界のことヲ♡」
　違ウ！　チガ……、あレ？　チガウ……？
「私たち獣神と人間が交わり、孕み孕ませ、そして産ミ散らかシた仲間たちで溢レル、『快楽へ進化した世界』♡　小兎姫の皇神様へノ信仰モ、私、小春へノこれまでの人間の世界デハ禁忌とさレルその恋心モ♡　全テその世界ヲ作るためニとっても大切なモノ♡　小兎姫ハ、私の言ってイルことを否定シテ、あなたの大切な信仰モ、恋心モ、捨ててしマウのかシラ？」
『ショクシュ……、チンポ……。触シュ、チンポォ♡　触手ぅ♡　おチンポォ♡』
『私、近衛小兎姫はこれより、わが祖国と祖国を護る皇神様の盾と矛となり、この身果てるまで誇り高き戦艦皇として戦うことを――』
『メスブタ……、オマンコ……、ショクシュチンポ……♡　メス豚……、オマンコ……、触シュチンポ……♡　牝豚♡　オマンコ♡　触手チンポ♡』

そウ。私が抱いている信仰心も、戦艦皇としての皇国、ひいては皇神様への忠誠心も、小春に抱いているこの恋心モ、さらには今この身体と戦皇具に迸る、溢れ暴れ出ス淫らナ獣欲モ――。

触手から時間を追うごとに増やされていく快楽と見知らぬ記憶の奔流が、これまでの艦獣との戦いで浴びてその身に沁み込んだ艦獣の体液の残滓、そして小春が与え続けたクスリの効力と結び付いていく。その結合がある領域まで到達した瞬間、文字通り臨界点を迎えた小兎姫の心の奥底にひた隠しにされていた眠れる獣神が、禍々しい光とともに解放され、小兎姫の、否、戦艦皇因幡の身体を包み込んでいった。光に包み込まれた白兎のような皇護装が瞬く間にどす黒い闇色に染まっていく。さらにはその身体を貪り続けていた触手がその先端から戦艦皇因幡の内外へ白濁をぶちまけ始め、胎は孕み、その瞳と表情から正気が抜け落ち、悦楽の色に染められていく。あっという間に臨月の妊婦のようになった胎が蠢き、次の瞬間にはその股間を突き破るように触手が、否、獣のソレよりも逞しく悍ましい肉棒が屹立する。最後に裏返っていた瞳が元に戻ると、宝石のように美しかった紅い瞳に邪悪な輝きが灯る。『日本皇国の誉』と呼ばれた戦艦皇因幡はもう、そこには存在しなかった。

「さァ♡　もう待ちきれませんワ♡　早く私たち獣神と、私たちを奉り続けている者たちのためにモ、『快楽へ進化した世界』を作り始めまショウ♡」

「えェ♡　早く仲間ヲ産み散らカシましょウ♡」

じゅぶじゅぶと音を立てて私と同じように屹立させた小春の肉棒と鈴口で口付けを交わし、続けて私が小春の肉棒を、さらに小春が私の肉棒を鈴口で呑み込んで快楽の交換を済ませたところで、私と小春を呑み込んでいた触手が蠕動しはじめ、私はこれから自身と小春で『作り直す』世界へと産まれ堕ちて行った。

「クソッ！　ありったけの火力と術力をぶつけてもびくともしないッ！　これまで遭遇した艦獣とはわけが違うぞッ！」

戦艦皇因幡を触手の中に呑み込んだ後沈黙を続ける艦獣目掛け、因幡の僚友であり彼女に次ぐ戦果の持ち主である戦艦皇信濃はもう何度目かさえ分からなくなってしまった砲撃と術式攻撃を繰り出す。これまで屠ってきた艦獣ならもう既に『鎮滅』できていてもおかしくないはず。しかし今目の前にいる初めて観測された人型艦獣は投入された全戦艦皇の攻撃をまるで吸収するかの如く受け流し、そこに留まり続けるのだった。

「因幡、必ず救い出すからな、待っ――」

信濃が折れかけた決意を新たに立て直そうとしたその時、

じゅる、じゅぶじゅぶずぶずぶぅ。

頭上でうねり続けていたひと際太い触手が蠕動音を轟かせると、

「い、因幡ァァァァッ！」

頭上で口を開けた触手から、文字通り仲間である戦艦皇因幡が降ってきた。呑まれる前とは異なる、白黒反転した禍々しい姿となって。

信濃へ降ってきた因幡は閃光のような素早さで信濃の背後に回ると術式攻撃を繰り出し、瞬く間に彼女の纏う戦皇具をその身体から切り落とすと、

「いッッッあひぃぃぃぃぃッッッッッ♡♡♡」

全身を防護していた戦皇具の力が切れた信濃の秘部めがけ、因幡から屹立する極太肉棒を突き立て、俗にいう駅弁体位に持ち込むと、身体の自由を奪ったのだった。

「い、いな、ば、ぁひぃぃぃ♡　お前、な、なにを――ッ！」

「なにって、ナニですヨ♡　『獣神皇因幡』として最初の孕ませ産み散らかし相手を信濃さんに決めテ、信濃さんノ処女まんこ初喰いしただけです♡」

「な、何を言っ――」

信濃が反論する間もなく因幡が強烈な跳躍を決め、海面から離れると陸地へ、戦艦皇が護るべき市民が暮らす海沿いの街の中へと降り立った。信濃の秘部を貫く肉棒の根元から触手が生えると信濃へ絡みつき、まるで性玩具の如く肉棒を扱くための道具として扱われ、射精された白濁で胎が膨らむ。

さらにそれだけでは物足りないと言わんばかりに、今度は因幡の戦皇具に聳える砲身が触手へと変貌し大蛇の如く鎌首をもたげる。その極太触手は肉棒から雨後の筍のように生え続ける触手とともに、恐れ戦く老若男女問わない市民のもとへ、快楽を貪り吐き出すべく矢のように繰り出されたのだった。

女の身体に絡みつけばその身体の穴という穴を犯し白濁を注ぎ込み、異形の獣を孕み産み散らかしながら自身も同じく獣へと変貌していき、男の身体は成すすべなく触手の中へ呑み込まれると取り込まれその身体を触手へと変貌させられた末に、彼らが持ち合わせていた男性器のみ肉棒触手として他の女体をだれかれ構わず犯すための道具としてこき使われていく。人間以外の生き物も、新たなる世界の住人を生み出すための孕み袋に使われるか、孕ませ要員である触手を増やすための養分として取り込まれていった。

国民を、国土を護る存在だったはずの戦艦皇因幡はもういない。いるのはこの世界を快楽の獣たちだけが暮らす世界へと作り変える『獣神』と、それによって生み散らかされた眷属たる快楽の獣のみだった。

「さァ皆さン♡　これは私たち皇神様の、いいえ獣神様の思し召しでス♡　早ク私たちニ孕ましサレ産み散らかサレ、コの世界に相応しイ、争いも憎しみも微塵も存在シない、『快楽の獣』へ産まれ変わりましょウ♡」

―おわり―

聖煌龍姫
アルマスフィア

エンゲージ
結装!!

待ちかねたぞ
アルマスフィア

今日こそお前を
わが物として
やろう

ふざけないで！
誰が貴方の
モノになんて―

邪龍神ディア・バハム…
貴方の野望も
ここで終わりよ！

だが既にお前は
わが腹の中よ

!?

しまっ…

か、身体が
動かせな…

ニュル…

我が黒き繭の
中で…

お前の心の底の
欲望の
望むままに

ニュル…

我が器に
相応しい姿に
作り変えてやろう

なッ
何…

やめ…っ

残虐…淫蕩
貪欲…傲慢…
様々な不徳を魂に刻み込む
ドクン…
ドクン
ドクン…
ドクン…
ドクン…
より暴力的に
より淫らに
身も心も我が巫女にぴったりの姿へと…
ドキッ
ドキッ
ドキッ
おお…
繭が割れる…
黒き龍の巫女の誕生だ!!
邪煌龍姫バハムディア
生まれ変わった気分はどうだ？
最高です♡♡
このような素晴らしい身体にしていただいて…
エンゲージ
結婚♡
ありがとうございます
邪龍神様♡
(ディア・バハム)

罪禍の御名

小説／いなづまこと
挿絵／常時紅蓮

それは、ほんの一瞬の出来事だった。

私、結城ひろは幼なじみの道行彼方（みちゆきかなた）といつもの帰り道を一緒に歩いていた時、歩道に突っ込んできた暴走車に巻き込まれた。

私は直前に彼方に体を押されて車から離れられたが、代わりに彼方は車と塀に体を挟まれ救急車で運ばれることになった。

すぐに手術が行われ一命はとりとめたが、予断はならないとお医者さんは言っていた。その後気が気でない状態で家には戻れたが、自分のせいで彼方が大けがを負ってしまったことが心を苛み、一睡も出来ないまま一夜を過ごすことになった。

そして翌日、心ここにあらずといった状態で学校には来たが、授業を受けるどころか何も耳に入ってこない。

「ねぇ……ひろ、大丈夫？保健室行こうか？」

友達の霧絵が心配そうに声をかけてきてくれたが、力なく首を横に振る。正直、歩くことも億劫だ。

そのまま、自分にとって何の意味もない授業が延々と過ぎ、放課後になってみんなが教室から出ていった後も私は一人残り続けた。

後から聞いたことだが、暴走車の運転手はスマホ運転をしていて前を見るのが遅れたらしい。そんなくだらない理由で彼方は生死に関わる大怪我をしてしまった。とっても腹立たしい……のだが、周りを見ていなかった私も悪いのだ。

何しろ、私が車から逃げていれば彼方は巻き込まれずに済んだのだ。だって、彼方が私を全身で押したことで私は逃げられた代わりに、彼方は車の真正面に出てしまったのだから。

「……」

いくら後悔してもしきれないし、後悔したところで何にもならない。一体彼方にどんな償いをすればいいのか。いや、どんな償いをしようとしても、もし彼方がこのまま死んでしまうことになったら何にもならない。私のせいで彼方が死んでしまうなんて想像もできない。いや、もしかしたらその想像は現実になってしまうかもしれないのだ。それも、今すぐにでも……

そんなの、耐えられない。彼方が私のせいで死んでしまうなんて耐えられない。そんな世界、いたくもない。

まだ彼方は死んではいないのに、思い描く未来は彼方が死んだものしか浮かんでこない。そんな世界にいたくない。ならばいっそ、私もこの世界から消えてしまえばいい……そう考え、ふらりと腰を上げて教室の扉を開ける。目指すは屋上階。そこから飛び降りれば……などと物騒なことを考えていた時

「……どうしたんだい？」

私の前に一人の男が立っていた。

「あ……綺羅……先生？」

この人は……教育実習生の綺羅先生。まだ若いけど気さくな人柄で生徒からの評判もいい。……私のクラスでもファンクラブが出来るくらいの人気があるが、私はそこまで気にしてはいなかった。

「何をそんなに深刻そうな顔をして……なにか、困った事でもあるのかい？」

「あ……いえ……そういうわけじゃ……」

まさか死のうとしていた、などとは言えるはずもなく適当にはぐらかそうとしたが上手く言葉が出てこない。

「あ、あのその……えっと……」

「まあ……ちょっと落ち着いて。

立ち話もなんだから、教室で座って話してご覧。もちろん、僕が聞いてもいい話であればだけど」

よっぽどひどい顔をしていたのか、先生は心配そうに私の顔を覗きこんでくる。何でもないと言ってこのまま振り切ってもよかったのだが、面識もあまりない一生徒に親身になってくれる先生にぐずぐずと燻っている心の想いを少し吐露してもいいかもと思ってしまった。

「……わかり、ました。じゃあ、中に……」

開けたままだった教室の扉を再びくぐり、廊下側に近い椅子に腰かける。教室の電気はついてはいないが夕焼けの明かりが間接の照明となって先生の顔を照らしていた。

「さて、それで一体何に困っていたんだい」

私の顔をじっとのぞき込んでくる先生。その

常時紅蓮

顔は先ほどとは打って変わって真剣なもので、話を真面目に聞いてくれそうな雰囲気を放っている。この人になら、腹を割って話してもいいかもしれない。という気持ちにさせてくれる顔だ。

「実は……」

幼なじみが自分を庇って交通事故にあい、今も生死の境を彷徨っていること。そのことで絶望の淵に落ちてしまった自分……時には涙ぐみながら、時には声に詰まりながら話したそれらを、先生は身じろぎもせず真剣に聞いてくれた。

「……私、もうどうやって謝っていいのかも全然わからなくて……いっそ、このまま死んでしまえなんて思ったりもして……うっ、うぅ……」

先ほどまでの抑えようもない自虐心がまた身体全体を包み出し、涙と共に全身がガタガタと震えだしてくる。そんな自分の両肩に、先生の冷たい手がそっと置かれた。

「そんなに気を病むことはないよ。君は何も悪くない。そう、何も悪くないんだから」

「えっ……？」

悪くない……？なぜ？私は彼方の人生をメチャクチャにしてしまったのに……なぜ……？

「悪いのは君の幼なじみに向けてぶつかってきた車に乗っていた人間じゃないか。その人間がバカな運転をしていなければ君も幼なじみもこんな目にあわずに済んだんだ。君は何もそのことに負い目を感じる必要なんてないんだよ」

「そ、それは……」

それは、確かにその通りなんだ。悪いのはぶつかってきた車と車の運転手。よそ見運転をしていてこっちに向かってきたんだからどう考えても情状酌量の余地がなさすぎる。

けど、それでも、そこに私がいなかったら彼方を巻き込むことはなかった。私が彼方より早く車に気が付いていれば車を避けることができ、結果的に彼方が押しつぶされることもなかったんだ。そう考えると、全てを車の運転手の責任と考えられるほど私の心は自分勝手にはなれなかった。悪いのはあくまでも自分だという想いが溶かしようのない罪悪感となって心の中にべったりと張り付いていた。

「そうかも……しれないですけど、私はそこまで割り切れないです。私が彼をひどい目にあわせてしまったのは事実なんですから……」

ただ、先生に自分は悪くないと言われたことで少し自分の中の罪悪感は消えた。今死ぬのはよそう。せめて、彼方の容体がどうなるか決まるまでは。多少なりとも私に生きる力を与えてくれた先生には感謝しないといけない。かも。

「……少しは心が楽になりました。話を聞いてくれてありがとうございました綺羅先生。それでは……」

そう言って私は席を立った。が、

「まあ、待ちたまえよ」

先生はまだ私を呼びとめてきた。

「……なんでしょうか？」

こんな私の相談に親身に乗ってくれた先生は嬉しかった。だが、こうまで世話を焼かれてくると正直鬱陶しい。さすがに不快感を露わにして鋭い目つきで睨む。が、先生は飄々とした態度で私を眺めていた。

「君は、今時珍しいね。自分だけで罪過を受け止め、他者へそれを転嫁しない。車の運転手が悪いに決まっているし、何なら君を突き飛ばした男だっておせっかいだったと笑うことも出来るだろう。

だが、君はそんなことを微塵も考えず、ただただ自分だけを悪人に仕立て自分だけが罪を被ればすべて解決すると考えている。ここまで優しい……もとい、お人よしな人間はそうはいないよ」

「……っ！」

なんだろう、今までの先生と雰囲気が変わっている。さっきまでの先生は私をなだめるような優しさを持っていた。が、今の先生はどことなく小馬鹿にしているような雰囲気が見受けられる。

「だけど、それがいい。今どきこんな人間はとっても珍しい。こういう人間こそ、いい素材になるというものさ。

あ、そうだ。肝心なことを聞き忘れていたよ。ねえ、君……。君は、誰かと関係を持ったことがあるかい？」

「か、関係……?! かんけい、って……」

背筋にゾッとした冷たいものが走る。先生は明らかにさっきの先生とは違う。人のいい教師

という仮面を脱ぎ捨て、全く別の本当の顔を曝け出したみたいな、そんな感じ……

「分からないのかい？ウブというかカマトトぶっているというか……。男とセックスしたことがあるのかって聞いているんだよ」

「セッ……？！」

な、なにを言い出すのだろうこの人は！ほとんど面識のない生徒に向けてセ……セックスをしたことがあるのかなんて臆面もなく聞いてくるなんて‼そんなもの、あるわけないじゃない！セクハラ……というより、もう犯罪じゃない！

「い、い、い！いきなり何を言い出すんですか先せ……‼」

「先生……？誰がだい？」

その時、先生が目を細めて笑った……ような気がし……

「はっ！」

……だれ、この人。綺羅先生……って、誰？！そんな人、この学校にいない。教育実習生なんて、今はいない……！なんで私は、この人を『綺羅先生』だと思っていたの？今まで一度もあったことのない人間を！

「それで？君はセックスをしたことがあるのかと聞いているんだ。答えたまえ」

「そ、そんなの……

（言えるわけない。こんな、得体の知れない人に自分の、とっても大事なプライベートなことなんて……）

ありません！一度もセックスなんてしたことはないです……えっ？！」

えっ……なんで？！私、勝手に口が……？

「そうか。まだ君は処女なんだね。フフフッ、それはますます素晴らしい。

今の若い子は進んでいるというか節操がないというか、何人かに同じように聞いてみたんだけどみんな貫通済みでね。貞操の観念というのが無くなってきているんじゃないかね。実に嘆かわしいよ」

やれやれといった素振りで男は顔をすくめる。その仕草は本当に真摯に世を嘆いているように見えるのだが、それが却ってこの男が何を考えているのか分からなくしている。こんなことを私に聞かせて、この男は一体何をしたいのだろうか。

いやそれよりも、なんで自分の口は勝手に動いてしまったのだろう。

「あ、あなた……一体、なんなの……？」

危険だ。ここにいては間違いなく危ない。未だ飄々とした態度を崩さないこの優男が、さっきまで頼れる先生だと思っていた男が、今ではとっても恐ろしく見えてくる。

逃げなきゃ……今すぐに！と、教室の扉へ走り出そうとした……が

「まだ話は終わっていないよ。そこに止まりたまえ」

男の声が響き、踏み込もうとした脚はまるで張り付いたように動かなくなってしまった。

「君が処女だということは分かった。次はその身の程を見ておかないとね……。服を脱ぎたまえ、全部だ」

「ひっ‼」

なに……腕が、指が……勝手に動いて、上着を降ろし、ボタンを外していく……なんで！

「やめ……やめてぇ！先生ぇ！私の身体、勝手にいじらないでぇ！お願……いやぁぁ！」

だが、どんなに泣きわめこうと懇願しようとも男はそんな私をニヤニヤ見るだけで何もせず、そのままブラを外し、パンティをずり下ろし……何も纏わない自分の身体を男の視界へと曝け出す。

「あぁ……いや、いやぁぁ……だめ、見ないで……許し、てぇ……」

親にしか見られたことのない裸体をじっくりと見られ恥ずかしさと恐ろしさで涙が止まらない。せめて胸や股とか絶対に見られたくないところは手で隠したい……と思うのだが足と同様手も全く自分の思うとおりに動こうとしてくれない。

男はそのまましばらく私の身体をあちこちから覗き見た後、嬉しそうに顔を綻ばせながら手をパンと叩いた。

「ふん……肉付きもよく、かといって太りすぎということもない。肌つやも綺麗で健康そうでなによりだ。やはり健全な肉体には健全な魂が宿るということだね。

うん、いいよキミは……。今どきとしては珍しく、清く澄み切った人間だ。実に染めがいがある……」

「そ、そめ……なに、それぇ……」
男が一体何を言おうとしているのかさっぱり分からず、恐怖で視界が薄ぼんやりとしてくる。そんな私の眼にピントのぼけた男の顔がヌッと近づく。その目は……夕陽が反射しているのか……赤く、光っていた。
「さて……結城ひろくん……だったかな？君は、本当に自分が悪いと思っているのかね？自分が弱いから、そう思っているだけなんじゃないかね？
君は自分が弱いから、本当に悪い相手に何もできないと思っているんじゃないかね。何も出来ないから、自分が悪いと思い込んで贖罪を受けようと思っているんじゃないかね？」
そんなこと……思って……
「そんなことをして、本当に贖罪になると思っているのかい？本当に悪い相手が残ったまま自分だけ罰を受けたところで、ケガをした彼が喜ぶと思っているのかね？むしろ、自分のせいで君を辛い目にあわせたと悲しむのではないのかね？」
「……彼方が、悲しむ……？」
悲しむ……のかな。うん、悲しむかも……しれない。
「それはよくないよね。君が本当にしたいことはそんなことじゃないはずだ。君がやりたいのは……復讐だろ？」
「ふ……ふく、しゅう……？」
復讐……なんて、考えたこともない……そんな、こと……
「復讐したい。自分を、彼を酷い目にあわせた人間をこの手で罰したい。裁きを与えたい。でも、出来ない。出来ないから、自分を罰しようとする。裁こうとする。
でも、本当は復讐したい。当然だ。誰が好き好んで自分を罰するんだい？罰せられるべきは罪を犯した人間だ。無実の君が裁かれ本当の悪が何もされずに生きているなんて許される事じゃない。そうだろう？」
「それ、は……」
……それは、そうだ。悪いのはスマホ運転していたあの男に決まっている。もちろんあの男はこの後裁判所で自分のやったことに対する罰を与えられるだろう。だが、いくら重い罰を与えられたとしても、彼方の身体はもう元には戻らない。
そしていつか、男は禊を終え未来へ向けて歩きはじめる。が、彼方の未来は暗闇に閉ざされている。
「それは……」
「憎々しいと思わないかい？君たちの未来を奪った人間は大した罰も与えられずに人生を謳歌し、君たちは理不尽に与えられた不幸にその身を苛まれ救いのない未来を歩もうとしている。そんなことを大人しく受け入れられるのかい？」
「それは……っ」
そんなもの、受け入れられるはずがない。なんで裁かれるべき人間が裁かれず何の罪もない私たちが責苦を負わないといけないのか。そんなこと……許されるはずがない。
何故だろう。今まで微塵も抱いていなかった運命への憎しみ、辛み、悔しみがむくむくと湧きあがり、心の中を黒く染めようとしている。自分が悪いのではない。悪いのはあの男だ。あの男を裁くことのできない社会だ。社会を変えることをしない人間たちだ。そんな人間たちが闊歩する世界だ。
『悪いのは自分ではない』それを自覚することで自分の彼方に対する罪悪感、自分に対する憎しみは黒く塗りつぶされ、憎悪の対象は自分以外へと転嫁されてゆく。
（そうだ、私は悪くない。悪いのはあいつだ。私と彼方の未来を閉ざしたあいつだ。あいつが悪いんだ……あいつが憎い……憎い……憎い……っ！）
湧き上がる怒り。抑えきれない憎しみ。自然と眦はつり上がり食いしばった歯茎から血が滴り落ちる。この燃えたぎる怒りの感情を今すぐにもあの男に叩き付け、メチャクチャにしてやりたい。
一体自分の心のどこにこんな残忍な人格が眠っていたんだろう。いや、もしかしたらこれこそが本当の自分で今までは自分を知らなかっただけなのかもしれない。それくらい、私の心はどす黒い感情に支配されている。
「ふふふ……」
そんな私を見て男が笑っている。まるで、こうなることが分かっていたかのように。
「では改めて聞こうか。これから君はどうした

いんだい？まだ自分の手で責任を果たしたいと思っているのかい？」
そんなもの……答えは決まっている。
「思って、ます」
「……へぇ？」
それは男にとって予想外の答えだったようだ。確かに、今の答え方だとさっきと何も変わっていないように聞こえるだろう。だが、そうじゃない。
「……私の手で、あの男をギタギタに叩きのめし、自分のクズさを思い切り後悔させた後……殺してやる。他の人間なんかに裁かせなんかしない。私が……私が、あのゴミ屑野郎を、私の手で裁く……殺してやるんだぁ‼」
湧き上がる殺意が抑えられない。とにかく、あの男をこの手で殺したくて仕方がない。そんな黒い殺意に歪む私を、男は嬉しそうに眺めていた。
「うんうん、いいねぇ。元が無垢であればあるほど、闇に堕とせばこの上ないほどに輝く漆黒の宝石となりより強い世界の禍となる。ようやっとこの地にも禍の種を生み出せたねぇ。では……」
男が手を伸ばし、私の顎をくっと掴む。その手は凍りつくほどに冷たかった。
「さて、君の気持ちはよく分かった。理想的な回答を聞けて僕も満足しているよ。だけど……君はどうやってその想いを果たすんだい？」
「どうやって、それは……ぁ……」
それは……どうやってだろう。いくら殺したいと思っても私はたかだか15歳の小娘だ。力では絶対に敵わないしさりとて武器を使おうにもどうやって扱えばいいのかすら分からない。殺意はあって殺害方法もいくらでもあるが、それを実行できるとなると話は別だ。
「それは……えぇと……」
どうしよう。どうしていいか分からない。実行したいという気持ちは満々なのだが、そのやり方が思いつかない。あれこれと考えているうちに次第に心が落ち着きを取り戻してきて、あれほど熱風のように渦巻いていた殺意と悪意が急速にしぼんでいくのが実感できる。一体自分はどんなに恐ろしいことを考えていたのか……そんなことを思い始めた、時
「そう思い悩むことはない。僕が君に力を与えてあげよう。何者にも邪魔をされず、どんなことでも出来る様になる力をね」
男が、とっても魅力的な言葉を囁いてきた。
「えっ……」
どんなことでも、出来る……？私がしようとしたことが出来る……？諦めかけていたことを……出来る、力が……？!
「ほんと、に……？」
「ああ本当だ。人の世界では決して許されない、禁忌の行いですら軽々と実行できる……人の理を外れた力を君に与えよう。僕は君のような素質のある人間に力を与えるため、この校内に潜り込んでいたんだから」
「あぁ……！」
私の心の中で萎みかけていた禁断の想いが再び……いや、先ほどとは比べ物にならないほどの勢いで膨らんでいく。『人を殺せる力』、それを目の前の男は私にくれるというのだ。
手の届かない想いはいつか諦めて消えてしまう。だが、手に届くようになったと知った以上それは心にべったりと張り付いて、決して消せぬ想いとなる。
「ただし……その力を得るには、君は人を辞めないといけない。人の理を外す力は人という器の中には入りきれないからね……
さて、最後の質問だ。君は力を得るために人を辞めることができるかい？肯定するなら……目をつむりたまえ。否定するなら……顔を背けたまえ」
男が答えの分かりきっている問いを投げかけてくる。いや、男も解って言っているのだろう。
「……」
私は黙って目をつむり、視界は闇に閉ざされる。
「……それでいい」
と、男の声が聞こえ、両肩に男の掌が被さる。その冷たさにゾッと背筋を震わせた直後、喉首に二つの鋭い痛みが走った。
「っ‼」
一瞬感じた激痛。だが、次の瞬間それは脳天を貫くような気持ちよさに変わった。
「あっ……あぁ」
無意識に零れてしまう甘い声。頭の中がピンク色の霞に覆われ、熱い吐息が漏れて響く。特

に何かを刺された首は全身の熱が集まっているかのように熱く燃え上がり火傷しそうなほどだ。

「あぁ……あつぅ……あうぅぅ……」

気持ちいい。とても気持ちいい。こんな気持ちよさは今まで感じたことがない。体中から汗が吹き出し、股もはしたなく濡れている。身体中の体液という体液が噴き出し、滴り落ちているかのようだ。

「はひぃ……きもち、いぃ……あは、あぁ……」

全身が心地よい陶酔感に包まれ、何もする気がなくなってゆく。心の中の熱い想い、気持ちがどんどんとなくなっていく。まるで、身体から吸い出されているかのように……

（ううん、これは……本当に吸い出されているんだ……）

わかる。男が、私からどんどん吸い出していっているのが。人としての心。人としての常識。結城ひろという人間の何もかもが、男の中に吸い取られているんだ。

これが、人間を辞めるということなんだ。私の何もかもが無くなり、新しい私が生まれる。人の理に縛られることのない、素晴らしい私が……！

（ふふふ……最高ぉ……。こんないい気持ちになったまま、私は生まれ変われるんだぁ……。あはは……）

次第に消えていく人間の私。友達、お父さん、お母さん……これからの私には必要ない、色々なものが思い出しては真っ黒い闇の中に塗り潰されていく。そして最後に、本当に最後に思い出したもの……

（あ……彼方ぁ……）

とっても大事な、とっても大好きな彼方が現れ……霞む視界と共に闇の中に消えていった。

「……目覚めたまえ。新たなる『禍（わざわい）』」

頭の中に命令が響いてパチリと目を開いた時……私の世界は一変していた。

人の理を外れて新たな命を得た。そのことがはっきりと実感できる。人間として感じていたもの全てがくだらない些事のように思え、それらを壊したい衝動が渦巻いている。

そして、目の前におわすのは絶対の忠誠を誓う主様。まだ出会って間もないのだが、私の中に流れる『力』がそのことを教えてくれる。

「おはようございます、主様。私を『禍』にしてくださったこと、永遠の誉れとしてこの身に刻み込ませて戴きます」

主様の御前で忠誠の詞を口にする。血の気の抜けた肌。刃物のように研ぎ澄まされた爪。口元に納まらないほどに伸びた牙。どれもこれも主様の眷属としてふさわしい、『禍』としての私の体。

「これで君はこの世界の禍となった。人間に害をなし、大地に災いを振り撒き、世界に闇をもたらすんだ」

「畏まっております、主様。主様はその力を私にくださったんですから……う、うふ。うふふふ……！」

そうだ。主様は私に素晴らしい力をくださった。この力さえあればあの人間をいたぶり、縊り殺すことも簡単だ。後悔させてやる、私を……彼方を絶望に落とした報いを受けさせてや……？

「あ……かな、た……？」

彼方……ああ、そうだ。いたっけ、彼方……。私が、好きだった男……

「彼方……彼方、あぁ……私の、彼方……ぁ」

主様のモノになった私には、彼方はただのゴミでしかない。のに、黒く塗りつぶされた私の心にまだ彼方への想いは残っていたようだ。彼方を想っただけで胸が少しキュッと締まる。ああ、それだけ人間だった時の私は彼方のことが好きだったんだろう。

だったら……彼方、主様のモノになった私だけど……人間は害すべき存在だけど……

「彼方ぁ……あなたの全て、私が吸い尽くして『禍』にしてあげる。『禍』になれば……傷なんてあっという間に治るわ。そして……二人であの憎々しい人間を殺そう！

それから一緒に世界に災いを振り撒こう！うふふ……うふふふ！ひ、キヒヒヒィ‼」

彼方が私と同じになり、私の下僕となって世界の災いになる。それを思うだけで止まったはずの心臓が高鳴り、必要のないはずの呼吸が荒く激しくなってくる。そんな、時

「え……？」

教室に入ってきた霧絵が呆然と私と主様を見ていた。

「な……なに？ひろ……。なんであなた、裸…

…？それに、その男の人……誰……」

どうやら部活が終わった後忘れ物でもしたのか教室に戻ってきたみたいだ。なんて運の悪い……そして、幸運な人間なんだろう。こんなにも早く、この私の牙にかかることができるなんて。

「ふふ……いい時に戻ってきたね霧絵ぇ。私ね、今喉がカラカラに渇いて仕方がないの。あなたに流れる……暖かい命、ぜぇんぶ啜らせてくれないぃ？

もちろんお返しはする。あなたに永遠の命と素晴らしい力をあげるわ。あなたも『禍』になって、一緒にこの世界を蝕みましょう……う、ふふ……ひひひ……」

「ひっ……‼」

今の私に異変を感じた霧絵が血相を変えて教室から逃げようとする。でも、そんなことはさせない。

『だめよ、霧絵。立ち止まって上着を脱ぎ捨てなさい。そのままこっちに振り返って、その白い喉首を曝け出すのよ』

言葉に主様から与えられた『力』を込めて霧絵の脳に直接語りかける。すると、霧絵は言われた通りに振り返り、驚きと恐怖に彩られた顔のまま上着を脱ぎ捨て喉首を晒してきた。

「あ、あぁ……いや、なんでぇ……やめて、ひろぉ……。こないでぇ……バ、バケモノ‼」

「バケモノね……でももうすぐ霧絵もそのバケモノになるのよ。とっても素晴らしい、『禍』にねぇ！」

霧絵の瑞々しい命の匂いが鼻を刺激して少しの辛抱も出来ない。そのまま霧絵の頭と腕を掴みあげ、うっすらと見える動脈を目がけて真っ白な牙を刺し込んでいった。

「……」

私の股座の下には私に命を吸われ尽くした霧絵が恍惚の表情を浮かべたまま……ピクリとも動かずに横たわっている。私が主様にされた様に霧絵の命を吸う傍ら霧絵に私の『力』を流し込んでいたのだから大した時間も置かずに『禍』として目覚めるはずなのに、それがいつまで経っても目覚めないということは……つまり

「ハ、ハハ……。なぁに霧絵ぇ、あなたもしかして処女じゃなかったの？そんなお澄ましした顔して男とセックスしていたの⁈私に黙って、勝手に男作っていたの⁈

なぁんだ……それじゃ禍に出来ないじゃない。私に命を吸い尽くされて……このまま死んじゃうじゃないのさ！」

まさか霧絵に男がいてとっくに処女じゃなくなっていたなんて。これじゃ主様が嘆くのも当然だ。セックスをしたことがない人間じゃないと『禍』になる資格はないのに、私たちの年齢でさえすでにセックス済みの人間があちこちにいるのではそれは御眼鏡に適う人間を見つけるのは大変だろう。

「霧絵のバァカ！勝手に男なんか作っているから死んじゃうのよ！他より少しはましかなと思って吸ってあげたけど、所詮はあなたもつまらない人間だったのね！キャハハハハハァ‼」

やっぱり人間はダメだ。くだらなく愚かで救いがたい。人間の絶望の悲鳴を聞きたい、後悔の涙を流させたい。無様な命乞いをさせてみたい。

「ひろ、もう日も暮れてきた。あと少ししたら外にも出られるようになる。そして……お前のしたいことをするがいいさ」

「はぁい……主様ぁ……」

そう。忌々しい太陽は地平線に消え、美しい月が顔を出す。これからは私たちの時間だ。まずは彼方の病院に赴いて彼方の命を吸い尽くして禍にしてやるんだ。

「彼方ぁ……あなたはまさかセックスなんてしてないよねぇ……してるはずがないよねぇ。だって私たち、いつも一緒だったもんねぇ……。出来るはずがないよねぇ。

あなたを『禍』にしたあと……ベッドの上でたっぷり愛してあげる。その身体に、溢れ出すくらい闇の力を流し込んであげる……とっても、とぉっても気持ちいいよぉ……きっとねぇ……フフ、ウフフフフ……！」

教室に月明りが差し込んでくる。まるで、私と彼方の新しい未来を祝うかのように。

常時紅蓮

私を押し倒してどうするつもりだ

今ある脅威を終わらせてからにしろ!!

堕ちた果てに投職

クス

クス

クス

クス

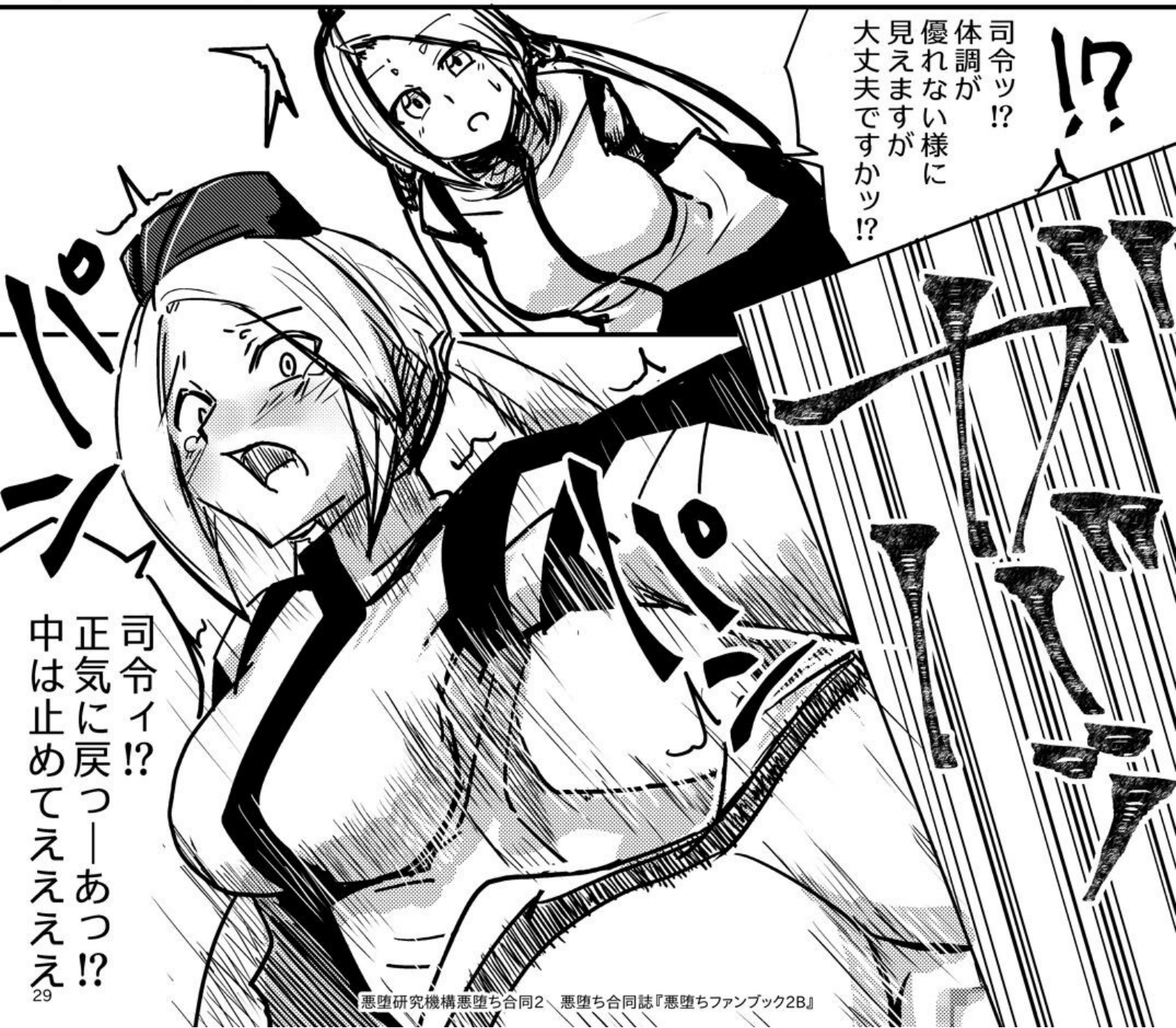
——司令その脅威は

【私たち】の事ですよ

投職
融合魔ヤマリットに生まれ変わったの
司令♡貴方も【私たち】になりましょう♡
ビュン
ギッ!!
【私たち】からのプレゼントです♡

ここはひとつ
ゲームを
しましょう

一週間増殖欲(私たち)を
耐えきれたら
解放してあげます


司令ッ!?
体調が
優れない様に
見えますが
大丈夫ですかッ!?
!?
ズボッ
パン
パン
司令ィ!?
正気に戻っ―あっ!?
中は止めてええええ

ああ

ごめんなさ

ありがとう司令♡
あたしを【私たち】にしてくれて♡

一週間後

駄目かぁ

殆どの隊員が【私たち】になってる

まぁゲームの勝ち負け関係なく

フフッ♡

【私たち】を増やさないとな♡

一週間後【私たち】に解放(転生)されるけどね

さぁ貴方も【私たち】と混ざりましょう♡

完

ハビタリアン

ak

「それでは、今回の会議を終わります」
夕霧由紀はその日、ハビタリアンの対策会議を終えて帰り支度を始める。彼女は科学防衛軍の女性司令官で、彼女自身も戦闘員として活躍した経歴を持つ。
スタイルが抜群の引き締まった体と腰まである髪と美しい顔とは裏腹に防衛軍の制服と勲章が歴戦を物語っていた。
「指令、今回の戦いも熾烈を極めましたね」
そこにやってきたのが三人の少年だった。三人はともに十代前半の小学校を出たか出ないかくらいに幼く美形だが、その体は不釣り合いな位に鍛えられていた。
「ごめんなさい、本来は私たち大人がやるべきことなのに、あなた達にまで戦わせて……」
「いいですよ、僕らも家族を失って、みんなを守る力を手に入れたからここまで来たんです」
「そうです、大切なものを守るのが僕らの力です」
「そう、大切なものか……」
由紀は荷物をバッグに入れようとしたとき一枚の写真が少年の足元に落ちた。少年が拾い上げるとそこに三人の男女が写っていた。
「これは誰です？」
「これは私の妹と幼馴染みよ。同じときに入隊したの。でも、ある任務で戦死したの。遺体は見つからなくて私だけが助かって……ごめんなさい、暗い話をして」
「いいですよ、その気持ちはわかりますから」
少年に写真を返してもらった由紀はそれをバッグに入れる。
「もう、帰るの？」
「ええ、今日は家で休むつもりよ」
そう言って由紀はカバンを持って会議室から出ていった。
車で家路に向かう道中で、彼女は複数の建物が瓦礫になっている場所に遭遇する。そしてそこでは家を失った人々が路上で野宿をしていた。
感傷に浸りながら車から降りた直後、激しい爆発音と衝撃が彼女を襲った。
彼女が振り向くと、青黒いラバースーツに女性もののブーツと膝下まであるローブを着けた戦闘員たちが、剣や銃などを持って暴れていた。
彼女は携帯する銃を発砲するが、何事もなかったかのように戦闘員はまた向かってくる。
「やっぱりこの武器じゃ役に立たない」
ふと由紀が振り向くと、子供に向けて一人の戦闘員が爆弾を投げつけた。それを見た由紀は「危ない」と叫んで子供を庇い、爆発に巻き込まれて気を失った。
どれくらい経ったか、由紀が目を覚ますと白い空間の中にいた。
「う、あ、あれ、ここはどこ。そうだ、あの子は、あの子はどこに？」
彼女は周りを見渡したがどこにも子供の姿は見つからない。
「目が覚めたようだな」
その声を聞いて彼女は後ろを振り向いた。そこには青いラバースーツに身を包み、銀色の髪をなびかせ、額には一対の角を生やした美形の少年がマントをまとい、同じくラバースーツ姿の男女を連れて現れていた。男の方は背中に複数の触手を轟かせて、女の方は包まれた頭から伸びる兎の耳を立てていた。
「だ、誰だ、お前は？」
「俺はファレル、ハビタリアンの地球方面の司令官だ」
「司令官、お前がその親玉というのか？」
「それは違う、俺は銀河系内外に広がるハビタリアン軍の一司令官に過ぎない」
そう言ってファレルはゆっくりと靴音を響かせて由紀に迫る。由紀は体をすごませる。
「心配するな、何も取って食うなんてことはしない」
ファレルは少年のような無邪気な笑みを作りながら彼女に唇を重ねた。彼女は予想外の行動に反発し、すぐに右手で張り倒そうとしたが従者に寸前のところで止められてしまう。
「夕霧由紀。お前は地球攻略の参謀として迎え入れよう」
「ふざけるな、誰がお前たちの仲間になんか」
彼女がそう叫ぶと同時に地面から筒状に膜が彼女の首から下を囲むと、一気に彼女の体に

張り付くように収縮し、体の首から下を青黒いラバースーツに包んだ。
「な、こ、これは、まさか？」
「そう、俺達ハビタリアンの戦闘スーツ。正確に言えばどんな環境にも対応するようにした外皮というべきか」
彼女はそのスーツを引き剥がそうとするが全く脱ぐことができなかった。
「無駄だ、すでにそのスーツはお前の体の一部になっている。永遠に脱ぐことはできない」
そう言ってファレルは由紀の背後に回り込むと胸と股間を触る。
「な、何をするの」
「俺の体液を、お前の体内に注入するのさ」
ファレルは背中から触手を出すと、乳首と股間に吸い付かせ液を送りこむ。
「く、くそや、やめ、あ、あ、あ」
「感じるのか、俺もそうだ」
ファレルは由紀に絡みつき、今度は先ほどとは比べ物にならないほどに濃厚な接吻を続けた。由紀の内部と外部では徐々に変化が起き始めていることに本人は気が付かなかった。
十分ぐらい経過すると、初めは嫌がっていた由紀は自分で快楽を求め始めていた。
「な、なんで、私は嫌なはずなのに……」
「お前も受け入れ始めたということだ」
そう言って股間に入れていた触手を外した。その直後に彼女の股間は徐々に膨らんでいき、男性器のような物が形成された。
「な、なんで男の物が？」
「我ら、ハビタリアンは効率的に生殖するために性別を一元化しているのさ」
「そ、そんな」
「気にするな、お前の家族と友人もお前と同じ反応をしたさ」
「え、今なんて、二人は生きているの？」
「勿論さ、実際にお前の目の前にいるのだからな」
「め、目の前？」
「仕方がないな、お前たち、顔を見せろ」
「「はい、ファレル様」」
そう言うと、従者の二人はマスクを引きはがした。その瞬間、由紀は悲鳴に近い声で絶叫した。その顔は写真より若々しくなっていたが、まぎれもなく妹と幼馴染みの顔だった。
「姉さん、おひさー」
「由紀ちゃん、ずいぶん老けたね」
彼女たちは見た目通りの子供のような無邪気な態度で再会を喜ぶ。
「貴様、二人を改造したわね」
「ぶっぶー、残念。私は姉さんが大嫌いだったの。いつも比較されて憎くて仕方がなかったの。だから私はファレル様のスパイとして暗躍して、彼と一緒に寝返ったの」
「由紀ちゃん。僕も科学防衛軍の腐敗にうんざりしていたし、ファレル様はこの地球の新たなる支配者にふさわしいと思って味方したのだ」
そう言って二人は固く勃起した由紀の男性器をいじくりながらお互いの舌で舐め合う。
「嘘よ、そんなの、それが真実なら私は何のためにハビタリアンと戦っていたのよ」
絶叫に近い声を上げながら、迫りくる快楽に必死になって抵抗する由紀であった。
半日が経った。由紀は放心した抜け殻の状態になって床に寝かされていた。彼女の心は二人の隠された真実や、変わり果てた二人の姿によって絶望に浸っていた。しかし、それ以上に、一向に収まらない興奮と欲望が溢れ出しそうな状況だった。
「落ち着いたか？」
由紀は答える気力すら完全に失せていた。今、どうすればいいのかわからなかった。
「夕霧由紀、もう一度聞くぞ。俺たちの仲間になれ、そうすればあの二人と一緒になれるぞ」
ファレルはさらに言葉を続けた。
「お前の参謀への推薦は何を隠そう、あの二人が願い出たことだ」
「えっ？」
「二人は我々の仲間になってからずっとお前のことを気に掛けていた。前々からお前を仲間にしたいと考えていたようだが、俺は断るつもりでいた。しかし考えが変わった」
そう言ってファレルは由紀を優しく抱き寄せた。その行為に、由紀の中に熱いものがこみ上げてきて股間に形成された生殖器が勃ち始めた。
「さあ、どうする？」
「いいわ、仲間になるわ」
彼女がその返事をした瞬間、ファレルを強く抱きしめてしまった。すると背中から複数の触

手が生え始め、額から一対の角が伸び始め、髪の中から兎の耳が生えてきた。
「あああ、ぞくぞくする。体が熱いいいいい」
「ふふふ、それが終わればお前は我々の仲間だ」
ファレルの言葉と同時に由紀は大きくのけ反って「あっ」という声とともに先ほどのクールビューティーから妖美な笑顔に変わった。
「ふぁ、ファレル、なぜかしら、あれほど憎んでいたハビタリアンが少しずつ愛おしく思えるようになってきたわ」
「そうだ、その気持ちが大切だ」
ファレルはユキを優しく抱き寄せた。それはカップルのそれと全く同じ類のものだった。
一時間後、別の部屋で由紀の妹と幼馴染みは口々に二人の噂をしていた。
「今頃、どうなっているのかな、あの二人」
「姉さんはショックで放心状態になっていたしね。それにしてもあの絶望、今でも爽快で気持ちよく思い出されるわ」
「そうだね、まさか寝返ったなんて知ったときのあの表情、今でも思い出すよ」
そう噂していると、扉が開く音がして二人が振り向いた。そこには女王のようにマントをはためかせる由紀だったものが現れた。
「ファレル様」
「お前たち喜べ、夕霧由紀は俺の妻にして参謀として我がハビタリアンの一員になった」
「ほんとですか？」
二人は思わず姉のほうを向く。一方の姉は威厳を持った態度で二人に近付いた。
「二人とも、よくも私を騙したわね。しかもそんなお楽しみをファレルと楽しんでいたとは許されない大罪よ」
「「も、申し訳ありません、お姉さま」」
「二人とも、ここではお姉さまではないわ。ユキ様とお呼び」
「「はい、わかりました」」
「まあ今回は私を仲間に推薦したことに免じて、私の触手でその続きをしてあげるわ」
ユキは自分の触手を巧みに使い、勃起した二人の乳首と肉棒に吸い付き快楽を与えた。
「ああ、き、気持ちいい」
「い、いっちゃううう」
そのような言葉を何度も繰り返しながら二人はいい意味での復讐を受け入れた。
「ああ、すごくいいわ。私が仲間になったら最初にこれをやろうと思っていたのよねえ」
「ユキ、復讐するのはいいが、後で見てもらいたいものがある。いいか」
ファレルの言葉に首をかしげるユキであったが、承諾して再び、続きを始める。
一方のファレルは固くした自分の物を抑え込んで部屋から出ていった。
数時間後、ファレルはカプセルの中にいる人間の子供を見つめていた。それはユキが庇った女の子だった。
そこへ由紀がタオルで汗を拭きながら入ってきた。
「ファレル、一体どうしたの」
「来たか、用というのはこの人間のことだ」
「この子は確か、私が庇った……」
「そうだ、お前と同時に回収したのだが、処遇に困っていてな。これくらいの子を仲間にしたこともあるからさして問題はないが……」
「なら、この子を私たちの養子兼実行部隊の隊長として育てるというのは？」
「いい意見だ。やり方はわかるな」
「ええ、勿論よ」
それを聞くと二人はカプセルのスイッチを押して、彼女をカプセルから解放した。
「うん、こ、ここはどこ？」
「お嬢ちゃん、大丈夫？」
「あ、お、おばさん、どうしたの、その格好？」
「おばさんは失礼だぞ、これから俺らの子供に生まれ変わるというのに」
「ち、ちがうよ、お前はハビタリアンでしょ。奴らは怖い人だってパパやママが言ってた」
「確かに、地球人には容赦ないがお前は特別に俺たちの子供になるのだ」
「嫌だ、怖いよ」
生まれた直後の羊のように震えるその女の子をユキは優しく抱き寄せた。
「大丈夫よ、怖がらないで。あなたにもハビタリアンの素晴らしさを理解できるわ」
その直後に裸の少女を膜のようなものが首から下を包み込み、華奢な体を締め付ける。それを見た二人は彼女の頭や口などに触手を突き立てて体液を送り込む。
「ふご、ごふ、うう」

女の子は吐き出したいと思っても無理やり飲まされて、苦しむ。一方の二人はその気持ちよさに沈み、徐々に仲間になっていく子供の変わりように喜びを感じた。

そしてその女の子は七歳ぐらいの体つきからものの数分で十二歳ぐらいの年齢に成長していき、その顔は徐々に喜びに変わっていった。

体を解放すると、その少女は思春期の年頃と変わらなくなっていた。

「ユキ母さん、ファレルお父さん。ありがとう、私を育ててくれて」

「お礼なんていいわ」

そう言って中途半端に生えた兎耳をファレルは撫でる。

「そうよ、それにこれからは私たちがお前の親になるのだからそんなにかしこまらないの」

そう言って三人は医務室の後片付けを戦闘員に任せて、そそくさと部屋から出ていった。

由紀がハビタリアンの一員になって半年が経った。今では彼女は科学防衛軍の時の知識を利用して、司令官として得た機密情報を提供しそれによる作戦を立案する。そして参謀としての辣腕を発揮して同胞達の信頼を勝ち取っていく。

この日、ハビタリアンの司令官にして、一児の父親でもあるファレルは司令官室の中一人で、寂しさを紛らわしていた。

「ふう、やっぱりいけない」

オナニーにふけっている所に背後から扉の開く音が聞こえ、すぐに気持ちを切り替えた。

「失礼、オナニー中のところ悪かったわね」

「なに、気にするな。お前こそ、一人の時にいじっているだろう」

卑猥な冗談をユキとファレルは笑い合いながら楽しんでいた。その様子を冷ややか且つうらやましそうな目で見つめるナナミ。そう、あの時二人の娘とした少女だった。

「ねえ、パパもママも冗談を言ってないで、早く報告を済ませて楽しもうよ」

「そうね、ナナミの言う通りね。ファレル、これが今回の作戦報告書よ」

ユキは端末で今回の作戦で被った被害と戦果を送った。

「ふむ、十人ほどの死者と三十人ほどの負傷者。それに対して防衛軍の装甲車両二十両三百人の人間を倒し、二百人の人間を確保後、改造洗脳か、まずまずの戦果だ」

「実はお父様に申告したいことがあります」

「なんだ、言ってみろ？」

「ハビタリアンのチルドレン部隊に新たに戦隊長を任命したいのです。規模が大きくなったので、あたしじゃ指揮に限界があるんです」

「確かに規模がでかくなれば、指揮がし辛いが隊長の資質を持った者はそう多くは……」

「それならば、提案があるわ。スパイとして潜入している科学防衛軍の中にナナミと同じくらいの少年戦士がいるわ。そいつらを使えば素晴らしい戦力になるわ」

「ホントなの、ママ」

「ええ、私が保証するわ」

「よし、彼らの確保は任せる。確保次第ナナミの指揮下に入れる。いいな」

「「はい」」

会議を終えた三人はベッドに腰かけて彼らだけの楽しみが始まった。

ファレルは、固く太く大きくなった肉棒を見せつけながら横になる。

ナナミが固くなった自分の物と、父親の物を絡ませて、こすり合わせた。

「じゃあ、私は彼のお口に」

ユキは自分の肉棒をファレルの口の中に挿入しピストン運動を始める。

「あああ、我慢できない、ママ、一緒にキスさせて」

「仕方がないわね、じゃあ、遠慮なく」

そう言ってユキはナナミと自分の唇を重ね合わせた。

三人の体から伸びた複数の触手が互いに吸い付き合い液を送り合いその快楽を部屋いっぱいに共鳴させていった。

■人類最後の英雄　ミレイン　　魔法屋

――我らに服従せよ
――我らに同化せよ

おぞましい声が、頭の中に直接響いてくる。
支配者のように高圧的で、それでいて甘く蕩けるような、聞く者を魅了して強制的に従わせるような「声」が、侵食された神経網を伝い、脳内に這入りこんでくる。

……耐えなければ。
ミレイン・アマギ大尉は、強く奥歯を噛み締めた。

「人類最強のゴーレムライダー」
「異属殺しの戦乙女（ゼノ）」
救星統合軍ＥＭＥＴＨの兵士たちの間で、ミレインはそんな輝かしい二つ名で呼ばれていた。
異属と呼ばれる謎の敵の侵略を受けて、人類が先の見えない末期戦を戦い続ける時代。
その絶望的な世界にあって、常に最前線で人型兵器（ゴーレム）を駆り、敵を屠り続けるミレインの存在は、いつしか人々の希望になっていた。
（その私が、ここで異属に屈するわけにはいかない！　何とか脱出して、一刻も早く戦線に復帰しないと……！）

――所詮は無駄な足掻きだ
――もはや人類に希望などない

わずかな希望に縋り、必死の抵抗を続けるミレインを、侵略者の声が嘲笑う。
実際、状況は絶望的だった。
第十三次ゼノハイヴ攻略作戦。人類の命運を賭けた決戦のさなか、ミレインは乗機を撃墜され、異属の虜囚に堕ちた。

それから何日が経ったのか……。
ハイヴの奥深くに蠢く不気味な肉繭に全身を包まれたミレインは、肉体の穴という穴を異形の生殖器で犯されていた。

膣、肛門、口腔、乳首……あらゆる部位から侵入した触手が、白濁した体液とともに、数億個の精細胞を吐き出す。
その全てが、ヒトの細胞を侵食し、遺伝子を書き換える悪魔の生物兵器だ。
細胞が、肉体が、徐々に人ならざるモノに変異していく。その感覚は、言語に絶する不気味で異質な代物だった。
だが、最も恐ろしいのは、そこに異常なほどに鮮烈な快感が付随することだ。
細胞ひとつひとつが性器となり、侵略者の遺伝子に犯されることを喜んでいるような、背徳的な官能の悦び。
歓喜と多幸感の波が襲い、極彩色の快感がスパークのように弾けるたび、人類最強の英雄はガクガクと全身を震わせ、体液をまき散らしながら絶頂した。

――見よ、抵抗など全て無意味だ
――ヒトを捨て、快楽を受け入れよ

（負け……ない。絶対に……！）
頭の中で響く声に抗うように、ミレインはそう繰り返す。これで終わりではない。人類はまだ、敗北を認めていないのだ。
だが……快楽の波が去ると、代わりに強烈な肉欲の疼きが襲ってくる。
侵略者の精を求めてヒクつく子宮。無様に肥大した乳房と、性器として開発されきった乳首。全身の肉は淫臭を漂わせ、妖しくオスを誘う。
足りない。もっと犯して欲しい。
爪先から頭まで、細胞全てがそう合唱しているような錯覚を、ミレインは覚えた。
（私は……ずっと戦ってきたんだ。こんな欲望なんかに屈したりしない……）
頭でそう思いながら、しかし、気が付けば口が開き、勝手に言葉を紡いでいる。
「やめ……ないで……犯して！」
ダメだ。その先を言ったらもう――
「服従しますっ！　異属の手先にでも何でもなるからぁ……だから！　逞しいおチンポで子宮かき回してぇ！　頭もカラダも犯しまくって、私の全てを征服してぇ！」
――ああ、これのどこが英雄だろう。
ここにいるのは、肥大した生殖本能のままに仇敵相手に媚びを売り、浅ましく肉の喜びを求めるメスでしかない。
最後に残った理性で、ミレインは願う。
誰か、今すぐ私を殺して――と。

■終焉の殲滅兵器　ミレイン　魔法屋

「あはっ♥　なんて素敵なカラダ♥」

生まれ変わった自身の肉体を見下ろし、ミレインは恍惚の表情を浮かべる。

全身を強靭な生体装甲に包まれたその姿は、まるで神話の怪物のような、四本腕の半蛇身であった。

脆弱なヒトの肉体などとはまるで違う。

異属（ゼノ）――いや、この星を支配する至高種（ドミネイター）の一員として相応しい、最高のボディだ。

しかも、この肉体の真価は他にある。

巨大な共生外骨格――いわば異属製の人型兵器と融合し、これを自在に操る能力が今のミレインには与えられていた。

かつて人類最強と謳われた英雄は、今や人類の敵として、人類側のゴーレムを一方的に殺戮する、悪夢の存在と化した。

神経接続された生体刃で装甲を抉り、敵パイロットを容赦なく握り潰すその瞬間。

――巨大な力を振るう喜びと、偉大なる至高種の一員としての使命を遂行する誇らしさに、ミレインはつい絶頂に達してしまうのだった。

「ああ、最高だわ……醜悪な人類（ムシケラ）の一匹にすぎなかった私が、至高種様の末席に加えていただけるなんて。あはあぁっ♥

ねえ、そう思うでしょう――ユウラ」

目の前で脈動する、巨大な肉繭。

その中に浮かぶ一人の少女に、ミレインは親しげに語りかけた。

少女が捕獲されたのは、つい先刻。ハイヴ内で行われた戦闘の最中だった。

少数のゴーレム部隊による特攻。破れかぶれとしか思えない作戦だったが、その中の一機が防衛線を突破。ゼノハイヴの奥深くまで単騎で侵攻してきた。

その技量はミレインから見ても驚嘆に値したが……ただし、相手が悪かった。

外骨格を装着したミレインに、瞬時に四肢を斬り飛ばされ、ひしゃげた機体のコックピットから少女が転がり出る。

傷だらけの身体で、それでも銃を手に人類の敵に立ち向かおうとする少女。

だが――機体を降りたミレインの姿を見た瞬間、少女の顔に動揺が走った。

「み……ミレイン隊長？」

――ああ、言われてみれば。

人間だった頃の不要な記憶は削除したが、彼女の顔はかろうじて覚えている。

ユウラ・ユークリッド少尉。

史上最年少でエースになった有望な新人で、かつてのミレインの部下だ。

……ああ、丁度よかった。

人類殲滅という使命を果たす上で、人型兵器のコアはいくらでも必要なのだ。

その「素材」が、今、目の前にいる。

「ほ……本当に隊長なんですか？

でも、その姿はっ……むぐうぅッ!?」

少女の口を己の唇で塞ぐと、ミレインは強い催淫性のある唾液を口内に流し込む。

そして、棘状の触手の塊のような生殖器を、かつての部下の胎内へと侵入させた。

「ひぎいいいっ！　なっ、何でっ!?」

「喜びなさい、ユウラ。あなたは至高の存在の一部になれる。醜いヒトの身体を捨て私のような至高種に生まれ変われるのよ」

そう告げると、ユウラは信じられないという顔で、かつての英雄を凝視した。

「そんな、裏切ったんですか!?　隊長はみんなの憧れで、人類の希望で、決して異属なんかに屈する人じゃ……ひあぁっ!?」

「あはっ、キモチイイでしょう♥　細胞を侵蝕され、私達とひとつになる感覚は！

これを味わったが最後、ヒトとしての誇りも正義もどうでも良くなる。最後には自分から懇願するの――このキモチイイ細胞で、私の全てを塗り潰して、ってね！」

「そんなのっ！　んあっ……嘘ですっ！

私は異属になんてならない！　絶対に、ぐッ、なりたくないのに……何れぇっ!?」

「何でこんなに気持ちいいのか？　ヒトが快楽に抗えない劣等種だからよ！」

「んあぁっ♥　ひッぐうぅぅぅっ♥」

不気味に脈打つ肉繭。その中で新生の時を待つ少女に――ミレインは甘く囁く。

「さあ生まれ変わりなさい、ユウラ。

この星の支配者、美しく残酷な人類殲滅兵器として、ね……あっははははっ！」

女王の祝福は狂気を謳う

波多野奈津目

人類の対異星文明とのファーストコンタクトは、侵略者という形で現れた。観測された外宇宙より飛来する十キロメートル四方ほどの有機体はゆるりと減速し、地球の重力に反発し中空を漂う『要塞』となった。地球人類は混乱の中話し合いを試みようとした。しかし返答は紫色の粘液を纏った蝙蝠の如き両翼を広げた、繊毛をより集めた虫にも神話の悪魔にも似た生物による殺戮だった。沈黙の後、粘液が死体を覆い軟体をねじ込み、立ち上がった死体より翼が背を割り飛び出し額に紫の結晶が輝いた。

「……ようやく会話が可能になりましたわね。この星の名は……ええ、地球、テラ、ですか。少しだけ我々の母星の名に似ていますわね。改めてテラの皆様、ご機嫌麗しゅう。我々はライザンテラという星から来ました」

粘液の中で捏ねられ続ける男性はその口を使わずして高慢な女の声を出した。

「異星文化との初接触というものは難しいですわね。まして……フフッ！　愚かにも同一生物内で殺しあい自らと母星を破滅に向かわせる、醜い生物がこの星の生態系の頂点などと！我々はこの攻撃を仕掛ける前にあなた方と対話をしようとしました。警告もいたしました。嗚呼、しかしあなた方と我々の文化があまりにも違いすぎた。技術レベルの差、でしょうか？ええ、それはあまりにも失礼ですので系統の違い、と言い換えましょう。こうして同化して、ようやく理解と会話ができた。ここにいる我々はライザンテラの下級兵士、ソルジャークラス。女王の目です。そして聡明なる我らが女王陛下は早くも判断なされた。テラの生命体の文化は残すに能わず、されど生命力と闘争本能において、我らの生命に取り込む価値はあるべきものである、と。わたくしは栄えあるその第一号に選ばれました。何という光栄なのでしょう、愚かなテラの民の皮を捨て、女王陛下のお声を代弁する栄誉を預かった!!」

男性は最早原型を留めず粘液と同じ紫色の豊満な双房と尻を振り、腰からは根のように触手が四方八方に広がり、申し訳程度に局部を覆う衣服を薄い粘膜でかたどった。そして周囲の人々とライザンテラのソルジャーの融合が終わり次々と同様の姿で立ち上がった。

「女王陛下の啓示を広げんことを！」

「女王陛下の祝福を皆に！」

声高らかに彼女たちは動き出す。怯え隠れた生存者、派遣された軍、全てにこの転生の喜びを伝え、共に終末を謳歌するために。

こうして、千年以上形を変えて生きてきたひとつの都市から、地球人類の姿が消え去った。ある者たちはその場でライザンテラの尖兵へと姿を変え、その他を空へと連れ去った。

繰り返される襲撃、その中で得られたデータを分析し、地球人類は抗おうとしていた。まず、ほぼ完璧な統率のもと動く兵士たちはその思念を集約させバリアを張る。最初の襲撃以降異形の姿は見られず紫紺の女性悪魔の姿で現れ、また確認された尖兵は犠牲者より多く、地球人類と同化したライザンテラがどうやら繁殖が可能かつその速度が迅速であるという認識が共有された。そして銃火器の類より意思を込めた近接戦が有効であるという確かな成果が得られ、戦線は膠着した。

「というのが三年くらい前の話ですね、先輩！」

「それで開発された異能力発現装置、アイギスとの適格者の選別が全人類に適用されるようになって、って流石に暗唱レベルだ。もっと適度な確率で出そうなヤマを頼む」

第十八極東方面アイギス中隊所属、神川小隊。神川カナデが学校での後輩の水上ナルと共に適合試験により徴兵、設立された新兵集団だ。正確に言えば同様に徴兵され一年ほど戦っている海藤タクマがいるが、所属小隊が彼を除き全滅したことに負い目があり指揮官職を辞退しカナデが小隊長に収まった。腕に装着するプロテクター・アイギスは魂の形により発現する能力が違う。カナデの能力は絶対防壁の結界だ。反転させることで敵を引き裂く剣にもなる攻防一体の能力。

「カンニングは流石に先輩の頼みでも。小隊長の先輩が合格点を取らないといけないとはいえ、真面目に取り組めば余裕じゃないですか」

「ナルはお堅い。ふざけつつしっかり予習して

いる俺よりクソ真面目だ。ナルの方が絶対指揮官向きだと思うんだよな」

ナルの能力は分析。敵の戦力、注意の向いている方向、弱点、次に仕掛けてくる攻撃まであらゆる情報が予測可能だ。タクマの槍術、そしてやはり新兵の滝沢サクノの化学反応——大抵の自然現象を起こし、傷の治療もできるため魔法でいいのでは、と初見の時にカナデが言った所浪漫が足りないという謎の訂正をされた——以上四名が神川小隊の戦力だ。

「先輩が向いてないなら私はもっと向いてないですって。皆を守る、って熱血して、それで結構要領良かったりするんですから」

「本当に要領がいい人間は指揮官なんてやらないんだって。能力の使い方とかは応用力の問題だし結局慣れだ」

どうにも学生のノリが抜けきらないが、戦績そのものは優れている。まず、敵にも言えるが防御能力は存在するだけで価値がある。まして市民を襲わせる訳にはいかない防衛隊の役割として、カナデの結界と敵の狙いをいち早く察知するナルの分析は絶対だ。一際戦力に優れた敵指揮官——コマンダークラスとそれに率いられたソルジャークラス、同化に失敗したと見られる形の崩れかけた使い捨ての雑兵のスレイヴクラスの部隊の襲撃は通常三小隊ほどで相手をする必要があるが、神川小隊は少なくとも時間稼ぎにおいて極東では類を見ず、撃破力も並の小隊以上にある。

「！　試験勉強はここまでです。コマンダークラスふたつ、ソルジャークラス三十余、スレイヴクラス……百……二百……!?　と、とにかく狙いはこの基地です！　挟撃です！」

「ったく、化け物ども多すぎんだよ！　出撃態勢!!」

「あらあら、たった四人で我々を抑える気ですの？　愚かなテラの人類の中でももっとも救えない防衛隊の方々。でも安心なさい、女王陛下は等しく啓蒙を下さいますわ」

コマンダーは不敵に妖艶な笑みを浮かべる。

「階級は別にして、だろうがッ！　スレイヴやソルジャーを盾にしやがって！」

十文字槍で薙ぎ払うタクマが舌打ちし一旦距離を取る。カナデの結界は半球状のフィールドに敵小隊を留めている。

「能力に応じて相応しい役割を与えるだけ、その役割に殉じるだけですわ。それにテラの民の寿命をほんの僅かだけ延長させるだけの悦びも幸福も知らぬ生贄のあなた方が言うと全く説得力がない」

返す言葉に困った。補給は少なく拉致されたものも多く、疲弊でアイギスによる能力は弱まっている。いつこの戦いは終わるのか。

「フフッ、わたくしはコマンダー・エリカと申します。防衛隊のエンジニアでしたの。だからあなたたちのことを研究して、消耗戦を仕掛けていました。ありがたき天啓。それを教えて差し上げたかった。ええ、我々はあなた方を讃えましょう。愚かしさを極めた、もっとも救われるべきテラの民であると！」

「！　毒霧が来る！」

「あーもうカナデ君の能力裏目ってる？　それともメタって来た感じ？　いいやいいや、片っ端から中和するだけ！」

サクノが水流を放ちコマンダー・エリカの臍に空いた噴出口を狙い撃つ。

「防ぐだけじゃ埒が明かない……ナル、タクマとサクノの火力で残ったソルジャーとスレイヴを一掃出来るよな!?」

「！　それって……ええ、大丈夫です！」

「カナデ君いいとこ持ってく気満々—。というわけでタクマ君、当たったらごめんね」

「いつものことだから今更気にしねえって！」

アイ・コンタクトを取り、カナデの結界が一瞬消失後コマンダー・エリカひとりを囲む。サクノの業火の中でタクマが舞った。

「見事、という他ありませんわ」

結界を鋭く集約した剣先を額の紫の宝石に突き付けられ、なおコマンダー・エリカは艶笑する。ライザンテラの急所を狙った死刑宣告と最後通牒を受けても、なお。

「わたくしという個の存続はあまり意味がありません、大人しくその刃を受け入れましょう。ですが、いずれあなた方も女王の庇護下に入る。そして知るのです、テラの民の抵抗が如何に無意味で、女王陛下が偉大であるか」

「ホンット、結局全部その女王サマの言う通りだから、お前らのお題目はいっつも同じだ」

呟いて、突き立てる。宝石が砕けると共にド

ロリと粘液が溢れ、全ては塵と泥になる。
「！　きゃあっ！」
「!!　ナル!!」
一息つこうとした時、ナルの悲鳴が響いた。とうに粘液に還ったはずのスレイヴの一体がコマンダー・エリカの崩壊と共にナルに襲い掛かったのだ。結界のナイフが幾千と降り今度こそ霧散させるが、ナルは座り込み震えていた。
「だ、大丈夫、です……怪我はしていません。ただ、私は自分では戦えないので……うっ……」
嗚咽する。神川小隊の勝利を支えてきた分析者だが、直接の戦闘力がないことはずっと彼女の劣等感になっていた。そして他の三人と違い自分が襲われれば何も為せず倒れてしまうという恐怖も抱え込んでいた。抑え込んだ感情が一気に噴出し震えることしか出来ない。
「私は、私は……」
「悪い、ナル。あいつを倒すのに夢中になって、一瞬でも気を抜いた俺が悪かった。向こうも片付いたらしい、医務室で見てもらって、温かいものでも飲もう」
ナルの検査結果に異常はなかった。サクノが溜め込んだお菓子をここぞと振る舞い、タクマがねぎらい、カナデはあたたかく付き添った。
その夜、ナルは寝る前に四回目のシャワーを浴びていた。綺麗好きの彼女だが、ここまでしたのは昼の戦闘での高ぶりからか、どうにも悪寒やむずがゆさが取れなかったからだ。
――目覚めなさい、コマンダー・ナル。
「えっ、や、や……」
頭に響いた声の意味を一瞬で理解した。ライザンテラは寄生し同化する。女王を頂上に置いた階級社会で、全てのライザンテラは女王の啓示のもとに動く。何より、スレイヴが襲い掛かった右腕、アイギスを装着していた箇所が紫色の粘液に覆われている――否、内側から粘液が溢れ出ているというべきか。
「やっ、ライザンテラなんかになりたくない！　助けて、先輩、タクマさん、サクノ……」
水音が全てを洗い流していく。造り変えられた腕の鋭い爪が静かに股に伸びて、薄い茂みの未開通の割れ目をなぞる。
――跪きなさい、コマンダー・ナル。
響いた声の命令通り、ペタリと膝をつく。指が秘部を嬲り踊る。先端をつぷりと入り込ませると、その形を崩し軟体が内部を埋めていく。
「やあっ、いやっ、やめてやだ先輩ぃぃぃぃ!!」
最早戦士としてではなく、凌辱を受ける少女として届かぬ悲鳴を上げ取り乱す。彼女の身体でその自由に出来る箇所はその口と思考だけで、足の形を整えていた細い触手はその結束を解いて床に縫い付け、その腕は内臓まで犯し、上半身の書き換えが急速に進んでいく。
「ひうううんっっ！　きちゃ、きちゃうっ！」
悲鳴はいつのまにか嬌声に変わり、閃光と歓喜を伴う脱力は急激に女王の祝福を招き心身に染み渡らせる。
「われわれは、ライザンテラのたみ。じょおうへいか、クイーン、ひとしく、しゅくふくを、けいじを、あらたなほしに。しんかする。じょおうのひごのもと。あらたなすがた……」
粘液は全身を覆い、あらゆる穴から、そして内側からナルを崩し造り変えていく。双翼が、そして男根が急成長し皮膚を食い破り、その声は礼賛を唱えだした。
「女王陛下万歳！　女王陛下万歳！　嗚呼、私は、我々に迎え入れられた！　この歓喜を知っていれば、無駄なあがきはしなかった！　伝えなきゃ……そう、女王陛下の教えを、啓示を皆に……コマンダー・ナル、活動を開始します」
警報が鳴り響く。昼に出撃した神川小隊は強制的に仮眠を取らされていたが、無残に砕かれ叩き起こされカナデは早々に戦闘着とアイギスを装着する。
「悪いな、夜食取ってた」
同室のタクマの姿がなかったことに得も言われぬ不安を覚えていたカナデだったが、いつもどおり豪快に笑うタクマを見て安堵した。
「おおカナデ小隊長殿。深夜のカップ麺をむさぼり食う大罪を犯したタクマ君とサクノちゃんを許したまへー。という訳でサクノちゃん準備万端でーす。ナルちゃんもおるでよー」
「えへへ、ちょっと眠れなかったのでお話していました！　先輩、頑張りどころですよ！」
「大丈夫かよナル、顔色悪いぞ？　昼の疲れが取れてないだろ」
「だからって休んでられないですよ。先輩に緊急のお知らせです。直近に探知反応、コマンダ

ークラス一のソルジャークラス二！」
「まさか侵入された!?　ナル、全力でナビを」
「必要ないですよ。先輩最後の出撃は、ここで終わるんです」
　どういう意味かと問う間もなく、タクマの槍が右肩を貫いた――全身を覆いつくす神経への痛み、毒を伴って。
「あっははは、ソルジャー・サクノの毒、かなり効いたでしょう？　こんばんは、先輩。コマンダー・ナル、女王様の啓示を伝えに参りました！　もうひとつお知らせです。もうこの基地で我々に同化していないのは、先輩だけですよ？　眠ったまま造り変えてあげても良かったのですが、先輩には女王様の素晴らしさ、そのお声の響き、心の底から心服して生まれ変わっていただきたかったので！」
　目が霞んでいるが、三人が異形に変異したのはシルエットと色だけでもわかる。タクマの顔がぐちゃりと一瞬軟体に溶けて、妖艶な毒女の笑みを浮かべたのだけがやけに鮮明に映った。
「……その姿でナルの言葉を騙るな、怪物」
　アイギスに精神を集中させるが強い反発を受けて全身の麻痺が強くなる。立っているのがやっとの状態だが、それでもカナデは敵を睨み毒づいた。
「んー、私はちゃんとナルですよ？　栄えある女王様の軍の指揮官、コマンダー・ナルです。テラのひとたちは誤解してますけど、私たちは女王様の代弁者ですが、ちゃんと自我と個性があります。その上で心の底から女王様を敬愛しその祝福を広げているのです。どれだけ残るかは人によりますけど。なので私たちが先輩のこと尊敬するのは変わらないです。あと、アイギスは使わないことをオススメしますよ？　もう蜜を流し込んだので、使えば精神回路から変わってしまいます、って手遅れですかね？」
――目覚めなさい、我が愛し子。
「!!　知るか、そんなの……!!」
　聞こえなかったことにする。聞いてしまえば終わりなのだと知っている。認められなかった。
「あはっ、女王様の直接のお声に逆らうなんて流石ですねえ。でもアイギスの力がないと先輩はただの学生あがり、それに先輩にもいくつか弱点があって……拒絶、をベースにした結界では、正面から戦ってもナルたちには絶対勝てませんでしたよ。でも折角なので、先輩に相応しい処刑場、啓示の場へ連れて行ってあげます」
　ぐろりと四肢を絡めとられ荷物のように下げられる。軟体が視界を覆い目を開ければそこから入り込まれ同化されてしまいそうだった。
「指令、受領。女王陛下に栄光を」
「女王の庇護をあまねく民に」
　無機質にふたりが同調した。ソルジャークラスは下級兵士だ、個の意思はほぼない。既に彼らは溶かされて呑まれてしまったのだと、そして己に待ち構える運命を覚悟した。
「聞きなさい、テラの民。愚昧なる防衛隊は、その皮を捨て我々となりました。救援はありません。この者に見覚えがあるはずです。誰よりもその身を削り、お前たちを守ろうとした男。さて、ここでひとつ尋ねます。どなたか彼の身代わりになろうという気概のある者は？」
　ライゼンテラの指揮官――ナルの声が響き、どよめきと空気の擦れまで感じられる。
「ふふ、残念ですね、先輩。どれだけ頑張っても民衆は先輩の力になってはくれない」
「仕方ないだろ。俺のように戦える奴の方が珍しい、っていうかおかしいんだ」
　挑発を受け流す。何の作用かはわからないが、嗜虐と余興を楽しむ個性が生まれたようだ。
「じゃあ先輩にいいお知らせを。分析結果が出ました。先輩はファクトリークラスに生まれ変わります。大変な栄誉ですよ」
「は？　ファクトリー……工場……そんなの聞いた……後方での兵力生産……!?」
　それでも言葉にはつい意識を傾けてしまう。今自由に出来る感覚だからか、既に女王の啓示を受け内心でその声を聴きたい欲が溢れているからか、ナルだからなのか。
「あ、勘違いは駄目ですよ。素質があるのって惑星ひとつを制圧して全生物を調べて一個体見つかるかどうかの激レアなんです。ファクトリークラスにいっぱい蜜をあげていっぱい種を作ってもらえば今のソルジャーとは桁違い。何なら他の交配で出来た種を預けるだけでも強くなる。未来の女王様になる方だって、ファクトリークラスが見つからないとなかなか産まれないんですよ。わかりましたか？　でもわ

からなくても大丈夫です、女王様は全てを教えてくださるからテストでがんばらなくってもいいんですよ。さて、薄情にも見捨てたあなたがたはここで見届けなさい。自然と啓示が下るでしょう。ソルジャー・タクマ」

「了解しました、コマンダー・ナル。指令を実行します」

指先がちゅるりと伸びてよりを作り鋭い針となった。両手の先に作った針を同時に乳首に突き刺す。

「があっ！　やめろ、タクマ！　ぐっ、こんなこと、で……！」

針から液体を注ぎ込まれている。戦闘着で抑え込んでいるが、水風船が胸に居座り膨らみ続けている。呼吸もままならないカナデにナルは口元を歪めて静かに囁いた。

「先輩はやっぱり私がいないと駄目ですね。精液管理くらい自分でやってください。こんなパンパンに膨らませて、私が壊れちゃいます」

強く脈打った。身体を造り変えられることまではいつかは訪れることと覚悟もしていたが、その声はひどく魅惑的で、狂おしい。

「あはっ、先輩ド変態さんなんですねえ。乳首犯されて大きなおっぱい生やされちゃって、ちょっとサービスでおかずにしていたナルのえっちな妄想をちゃんと言ってあげただけなのに……先輩のコンプレックス、ちょっと意外！」

「ッ、やめろ、俺は！」

戦闘着が切り裂かれた。不格好な双峰と巨大な男性器がまろびでて民衆が好奇心混じりの、そう、確かに奇異と喜びの声をあげた。

「やめろって言っても無駄ですよ。先輩の童貞デカチンだって大喜びじゃないですか。もっと早く先輩に使えば良かったですね、この分析能力。先輩結構モテるのにいつもいつ死ぬかわからないから、ってお断りしてる硬派な所も好きだったのですが、先輩はナルの気持ちも知って先輩もナルのこと大好きなのに、何も言わずにおかずにしてるムッツリ意地悪先輩だったなんて。コレ挿れたら確かに普通の女の子は無理かもですけど。嫌なんですよね、おちんちん大きいのからかわれるの。誰かに見られるのも嫌だったんですよね、いやらしいから！　あはっ、罵られると感じちゃうんですね。どうしようもないですねえ。私がお口で受け止めますよ」

甲高い声を抑え静かにいつもの調子を出して、耳に息を吹きかけた。

「ぜーんぶぜんぶ、綺麗にしてあげます」

「ん!!　んんー、ん!!」

カナデが何かを言う前に尻から生えた触手が口を犯した。そもそも男根はわかりやすいシンボルであって機能に差異はあまりない。流し込まれた液体はそれほど粘度は高くなく、乾いた喉は甘い恵みをとくんと飲み干した。

「ぐっ、何を飲ませ……ッ！」

解放されたカナデが自ら声を抑えた。高い声。少女の声。蜜を受け入れた喉が急速に変化を遂げたのだと嫌でも気付かされる。

「先輩が気付いてないだけ、気付こうとしていないだけ。次はお部屋を作りますね」

男根の根本、袋をかき分け宝石のようなライゼンテラの粘液の塊、種が植え付けられた。肉を割り根を張り、カナデの中を溶かしていく。

「んうっ！　ふぁあぁぁわあぁっ！　ナル、ナルっ！」

神経が、快感が直接弄られ、びゅくびゅくと白濁を垂れ流し穴が形づくられる。無意識に呼び叫んでいた。

――産み育てなさい、我が愛し子。

「先輩。もっと呼んで下さい。そうやってどんどんイって、いらないもの全部吐き出しちゃってください。そういえばファクトリーは産む能力に専念してもらうので、蜜を誰かにあげる機能はカットしちゃうんです。だから、このデカチンはナルが貰います」

「やめろ、俺は……ッ！」

抗議の声が耳障りで押し黙ってしまう。それでも漏れ出る嬌声があり、ぱくりとナルの口が飲み込んで――どれだけ夢想したかわからないが――妄想とは別に、感触が溶けて消える。

「ほらほら、クリトリスちゃんまで退化しちゃいました。このおっきい童貞チンポは、ナルがたっぷり使いこんであげます、って見えませんね？　じゃあ意識を集中させて下さいね」

豆が強くつままれ、弾かれグリグリと押し込まれた。

「ッ……！　はあっ、あッ、んんんっっ！」

「我慢してるともっと大変ですよ。本当にくだらない、ナルは先輩を先輩って呼び続けるために可愛くて大人しい世話焼きの後輩でいつづ

けなきゃでした。でも女王様は仰ったのです、何をためらうこともなく、ひとつになっていいと。ほら、クリイキしちゃって下さい！」

「やめ、やめっ！　こんな、こんなああァッ！」

すがる物もなく力を込められる場所もなく、脱力した身体はジョロジョロと尿を垂れ流す。カナデが地球人類であった証、男性としての肉体を全て排出するまで止まらない。

「はあっ、とまら、とまらあぁぁっ！」

排出口がひとつでは足りず、胸の針が抜かれたあとの穴から母乳のように泥が吐き出される。肌は既に変色し、乳は根付き豊満になお膨れ、唯一残された端正な顔立ちは女の悲鳴を上げるしか出来ない。それでも砕けなかった。狂うことが出来なかった。

――――聞きなさい、愛しい子。

強く胎動し、あ、と間の抜けた声を出してどぼどぼと工事を終えた残骸を泥として産む。建造されたばかりの空洞がやけに寂しい。

「先輩、聞こえていますよね。女王様のお声が」

「知らない、そんなの、お、れは……」

「女の子の声で言っても説得力ないです。さあ、一緒に唱えましょう。女王陛下の祝福を全てに」

「へ、いかの……いや、だ……」

カナデの本質は全てを守り貫く盾。ただひたすらに侵略を拒絶する一点だけが残っている。

「意地っ張りなんですから。もっと聞きましょう、唱えましょう。女王陛下の御心のままに」

粘液が耳孔をこじ開ける。女王の啓示をあらゆる感覚から直接流し込み同調を促す。

――――目覚めなさい、カナデ。歌い唱えるのです。祝福をあまねく広げなさい。

「めざめ、たたえ、あ、あ……ひとつだけ、ナル、聞いて、ほしい……」

手放さんとする最後の意思を弱く示す。

「はじめては、ナル、が、いい……女王陛下の教えを、ひとつひとつ刻んで、祝福を」

「はい、喜んで。その言葉が聞きたかったのです。いただきます、先輩。そして唱えましょう。女王陛下に栄光を。女王陛下の庇護を我々に」

カナデから吸収し複製した男根とナルが変異した際に生えたものを同時に挿入し、静かにカナデという存在にとどめを刺した。

「女王陛下に栄光あれ」

民衆は香気にあてられ、溢れた泥に侵され、口々に礼賛を唱えその姿を変えていく。

「女王陛下の慈愛を。女王陛下の祝福を。ふふ、コマンダー・ナル、ファクトリークラスの確保任務、成功いたしました。この地の収穫ともども、世界樹に持ち帰り、急ぎ設置いたします」

怯えている。戦えるものはほぼ全て狩られ、飲み込まれ、新たな尖兵として刃を振るった。加速度的に増えるライゼンテラに地球が打てる手は最早ない。まして空の要塞に連れてこられた者の末路は決まっている。胎動する樹の内部、巨大な大黒柱にも似た触手と胞の集まりを前に縮こまる。

「何という使えないものたちでしょう。これに並ぶはスレイヴにすらなれぬ、生命力も意思もないもの」

コマンダークラスが冷笑した。

「いいえ、我々は等しく女王陛下の啓示を伝えねばなりません。いらっしゃい、醜い皮と魂を捨て、陛下の御心を知るのです」

声と共に一本の触手が新しく根を張った。ぱくりと表面が割れ、ソルジャー二体に突き落とさせる。飲み込まれた者は確かに歓喜に叫びながらその姿を溶かし産み直される時を待つ。

「我々は女王の一部。私は女王の胎。新たな女王の巣立ちも近い。全てに女王の祝福を」

神川カナデという名を知る者は既に地上になく、また、この人型すら取らない『工場』がかつてその名で強く地球人類種を守ろうとしたことなど、誰も伺えるはずがない。

「先輩、私の子供をまた孕んでくださいね。全ては女王陛下の御心のままに」

再生産処理を終えて囁くコマンダークラスも、その意味は既に集合意識に溶け、習慣的な言葉をかけるだけだった。

聖女
度重なる魔族どもの侵攻から
人の領域を守るための結界を
維持し続ける巫女の事を
あたしの国ではそう呼んでいた
聖女に選ばれた少女は
その凄まじいまでの
光の魔力を
結界に注ぎ込み国を
そして人間達を守り続ける
魔力が尽き
命が失われる
その時までずっと…
そして、今代の聖女に選ばれたのは
この国の第一王女であり
あたしがこの世で最も敬愛する人…
あたしの大好きなリリーナお姉様だった…
お姉様は笑って国の為
民の為の礎になると言ってたけど…
そんなのあたしには耐えられない…
何とかお姉様をお救けしたい…
聖女とかいう馬鹿げた使命から
解放して差し上げたい…
その一心であたしは戦った…
魔族どもを一匹残らず
根絶やしにすれば
お姉様が死ぬ必要なんか
無くなるんだから…！
ふ～ん…
それで
こんな所まで
魔王(あたし)を
討ちに来た
……と♪
じゅる

ご苦労な事ね エリス姫♥

でも ここまで来た 貴女のその想い 気に入ったわ♥

だから 貴女の願い 叶えてあげる

な… なにを…？

ふふ♥貴女の中にも 貴女のお姉ちゃんと 同じくらいの 魔力が眠っているわ 貴女自身が 知らないだけでね

それを あたしが 引き出して あげるから

今度こそ 最愛のお姉ちゃんを 救けてあげなさい♥

女の後ろに隠れる事しかできない卑怯で汚らしい人間どもの手からね♥

な…に…これ…頭に直接…っ♥

だ、だめ…っ♥これ…半モチイイ♥気持ち良すぎて頭が…真っ白にい♥

そ、それに…来る♥

あたしの中で何か黒い塊が大きくなって外に出て来るぅぅっ♥

こ、これが…あたしの魔力♥

しゅごい…♥これなら本当にお姉ちゃんを…♥

ふふ♥考えてもみなさい貴女のお姉ちゃんを死に追いやっているのが本当は誰なのか♥

ああ…そうだ…

人間どもだ…

あいつら…自分達が助かるためにお姉ちゃんを生贄にして…

許さない…殺してやる…お姉ちゃんを傷つける奴は一匹残らず引き裂いてやる…

待っててね…お姉ちゃん…

生まれ変わったエリスが直ぐに救けに行くからあ♥

ふふ…どうやらイイ感じに闇の魔力が馴染んだみたいね♥
それで、早速愛しのお姉様を迎えに行くのかしら？
魔触淫姫エリス♥
ぐじゅるぅ
じゅぐぅ
ええ♥勿論ですわ魔王様♥見ててください直ぐにリリーナお姉様もここへお連れしますから♥
じゅぷ
あたしの魔触チンポで犯してこの世で最も邪悪な最凶の化け物に作り変えた後で♥
ええ楽しみに待ってるわ♥

甘美な贄

離宮

夕暮れ時、まもなく日が沈む仄暗さに包まれた高地に二人の少女の姿があった。
「うーん、予想よりもだいぶ寒いね」
「うん…メリディスは軽装だけど大丈夫？」
伝承に残る大悪魔召喚を目論むという異端集団討伐を依頼された少女達、神官ルイリアと剣士メリディス。資金不足の孤児院出身で幼馴染の二人は、院の窮状を凌ぐための報酬目当てに傭兵稼業をしていた。
「温熱効果のある魔石持ってきたからヘーキ。メリディスみたいにローブを着込んでたら動きにくいしね！」
「まぁ…今回の報酬多いしね。仕送りも余裕でできそう」
「そういうこと。頑張らなきゃね！」
敵が根城としているのは大昔に使われなくなった廃砦であり、近場の村からも半日かかる辺鄙な場所であった。重々しい廃砦の雰囲気に二人の表情は引き締まる。崩れた外壁を飛び越え二人は廃砦に突入した。
廃砦内部は静まり返っていた。時折、魔物が徘徊している程度であり、異端者の根城と聞いていた割に人の気配はない。底冷えする内部を順調に進んでいた。
「うーん……音は極力抑えてたけど、近くにいれば気づかれるはず。居ないのかな？」
二人は警戒しつつ進んでいるつもりだったが、肩透かし気味の状況で長時間の緊張を維持するのは難しいことだった。曲がり角の先の広間で魔物と戦闘になったとき、何処からともなくガチャリという音が響く。
「何か、音が…？」
「避けて！ルイリア！」
甲高い摩擦音が聞こえたかと思うと、部屋を二つに分断するように巨大な鉄格子が落下してきていた。前衛のメリディスと後衛のルイリアではわずかに距離が空いており、鉄格子は二人を隔ててしまう。
「メリディス！大丈夫⁉」
「こっちは大丈夫、問題ないわ。…後戻り出来ないみたいだけどね。私は進むしかないみたい。ルイリアも、さっきの分かれ道から先に進めないか試して！」
広大な廃砦にはいくつか分岐路があり、この広間にも手前で分かれ道があった。
「…わかった、やってみる」
どこかで合流できるはずと信じて、二人はそれぞれのルートで最奥を目指す。奥に分断されたメリディスには退路がない。
「本当に危なくなったら、なんとか逃げ回ってね…生きていれば、絶対に私が回復してみせるから……」
「心配しないでよルイリア。それより一人で戦闘なんて大丈夫？」
「私だって長くやってるから、大丈夫」
ルイリアは内心の不安を隠しながら、退路のないメリディスを案じる。実際のところ接近戦は不慣れで苦手意識もあるが、それでも親友のため、もう一本の通路へと歩みを進めた。
道中の魔物たちを単身で打ち破らねばならないルイリア。身体強化をかけ、浄化術や杖の打撃でなんとか魔物たちを捌いていく。しかし前衛として戦い慣れていない身には厳しい脅威が続いていた。数を増した魔物の猛攻で折れた杖を逆手に持って突き刺し、それも砕けたあとは落ちていた朽ちた剣で斬りかかり、ギリギリの攻防を繰り返し満身創痍だった。ローブの端々は切り裂かれ、体中に傷や痣が浮かび、土と埃と返り血で酷い有様になっていたが、回復術を自身にかけ気丈に前進を続ける。
「メリディス…無事に進んでいるかな…」
はぐれてしまった相棒の身が心配でたまらない。不安を堪え、やがて一際重厚な扉の前に辿り着く。扉の向こう側からは禍々しい気配と錆びた鉄の匂いが感じられた。そして、扉の手前にはメリディスの剣が折れて打ち捨てられていた。最悪の状況が脳裏をよぎり、逡巡する間もなくルイリアは扉の向こう側へ突入した。
「メリ、ディス……？」
扉の向こう側には、凄惨で悍ましい光景が広がっていた。部屋の中央には何らかの術式陣が描かれ、奥には祭壇が置かれている。壁際には隙間もないほどに亡骸が積み上がっており、祭壇の手前には黒い法衣を纏った人が倒れ伏している。それをじっと見下ろすのは、短剣を握りしめ返り血で汚れた親友。

メリディスは何事かを呟いて、ルイリアの方へゆっくりと振り返った。その表情は感情が抜け落ちたかのように虚ろで何も読み取れない。ルイリアが身構えるのと同時に、メリディスが突進してきた。

「メリディス⁉ 何を…」

咄嗟に横に飛び退いたルイリアが向き直る前にメリディスは更に短剣を振り回し、ルイリアは後方に飛び退く。

「贄が足りない…血が、器が…」

メリディスが正気でないのは明白だった。一先ず鎮圧しなければ正気に戻すこともできない。斬りかかるメリディスは普段の技の冴えがなく、ルイリアはかろうじて躱せているが徐々に掠り傷は増えていく。折れているとはいえ剣のリーチ差があり、不慣れなルイリアでも打ち合えているが、致命傷にならないように慣れない剣を振るうために腰が入っていない。腕力も足りておらず剣に振り回される格好で、長くは持ちそうにない。

「正気に戻って！一緒に帰ろう！」

呼びかけても反応がない。一度、重い一撃を与えるしか無いとルイリアは覚悟を決める。再び突進してきたメリディスを避け、背中へ大きく振りかぶって斬りつける。

「あぁっ！」

血が吹き出し暖かい飛沫がルイリアに降りかかる。メリディスは短い悲鳴を上げその場に崩れ落ちた。初めて人を斬った感触と、大切な親友を斬ったという状況に、思わず立ち竦むルイリア。冷え込む廃砦で、唯一暖かな返り血に一瞬心地よさを感じてしまう。辺りには濃厚な血の匂いが漂っている。

「……っ！いけない、はやく、治療を」

理解できない高揚を振り払うように頭を振りながら、親友のもとへ向かおうとしたそのとき、足元の術式陣が禍々しい光を放ち始める。夥しい返り血を纏っていた少女は、周囲一帯に満ちる瘴気の器として完成していた。

「何、が…⁉」

周囲の血という血が術式陣の中へと凝集し赤黒い水たまりと化す。濃密な瘴気と魔力が血と共に肉体へと染み込み、強烈な不快感と酩酊感にルイリアは膝をつく。戦闘の高揚と大切な人を傷つけた感触が何度も反芻され、不快な感覚がルイリアの精神を苛む。浄化術を必死に唱えても、瘴気は一層濃さを増すばかりで体の中も外も覆い尽くしていく。早鐘のように脈打つ拍動が耳にこびりつき、湧き上がるもどかしさと衝動と苛立ちに思わず咆哮を上げたとき、ルイリアの肉体は魔性の側へと一線を越える。

「え……？」

手の甲に縄のような血管が浮かぶと、岩のように固く隆起した筋肉に覆われ肥大化し、毒々しい黒紫色の体毛が生え始める。視界が明滅するほどの頭痛とともに、側頭部から鈍い光沢を放つ角が生成されていく。血溜まりに浸された華奢な足は、ゲートルを引き裂きながら筋肉を纏い肥大化していく。足先は爪が太く肥大化しながら指と癒着し、太く強靭な蹄を形成すると靴を突き破る。

血の水面に浮かぶのは、人体と山羊をいびつに織り交ぜたような悪魔の姿。

「嫌、だ…かわりたく、ない……！」

肉体が半ば魔と化す中必死に自身の身体を浄化しようとするが、既に浄化術は発動すらしなくなっている。どくん、と一際大きく鼓動を感じた刹那、恐怖の中に多幸感のようなものが鎌首をもたげた。ポロポロと涙がこぼれ落ちるが、多幸感の波は恐怖と絶望を押し流し始める。次第に自身を蝕む瘴気に心地よさを感じ始め、視界が真っ白になる程に快楽の波が押し寄せる。下腹部の奥底から穢れを欲する衝動が煮えたぎるように疼き、思考が覚束なくなっていく。

「いやだ、こんなので気持ちよくなんて…化け物にかわるのが幸せなんて、感じたく…」

生えた角を折ろうと力を込めるが強靭な角はびくともしない。鋭い爪が掠った皮膚を切り裂くが、瞬く間に傷口は再生していく。

「ぁ、ぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

恐怖と焦燥感に咆哮を上げながら、ルイリアの侵食は加速していった。

メリディスが痛みを堪えながら目を覚ましたとき、祭壇の間にはむせ返るような血の匂いと瘴気が充満していた。薄暗く肌寒い石畳の床から身を起こすと、ルイリアの姿が部屋の中央にあった。熱と悪寒を伝える背中の痛みに顔を顰めながらも、ただならぬ様子の親友に這い寄ろうとしたとき、霞む視界の中で大切な少女の姿がひどく歪んでいることに気がついた。身の

丈ほどの杖を振るうだけで精一杯だった記憶の中の少女とはかけ離れたその姿は、メリディスより二周りは大きい。透き通るようなプラチナブロンドの髪は根本から黒ずみ、妖しい光沢の黒い体毛が肉体の殆どを覆っている。元の数倍にも肥大化し強靭になった腕には鋭利で鈍く輝くかぎ爪が生え、木の幹のように太い大腿部からは獣のような骨格に変形した脚部が続く。屈強な肉体に反し、艶を帯びた乳房は同性であるメリディスでさえ吸い寄せられるような色香を放っている。頭には禍々しくねじ曲がった巨大な角が生えており、その姿はおとぎ話に聞いたような、魔物を率い人間を堕落させる大悪魔の姿だった。

　メリディスが目を覚ましたことに気づいたルイリアは目に涙を浮かべ激しく首を振り、頭を抑え込む。

「ルイリア…⁉ その姿は…」

痛みと混乱を脇に押しのけメリディスは呼びかける。状況を飲み込めないながら、健気に親友に歩み寄る。

「だ、め……こない、で……私を、置いていって……！」

ヒトの骨格から歪んだ足でうまく立てずに尻もちをついたルイリアに、メリディスは構わず歩み寄る。

「だめなの。ちがう、の。私、あなたを犯したくなんて、ないの……！」

メリディスが思わず息を呑むのと、ルイリアがすがるように肩を鷲掴みにするのは同時だった。徐々に肩を掴む手に力が込められる。

　眼前の親友の姿に仄暗い衝動が堪えられなくなっていくルイリア。押し倒したい、犯したい。衝動がルイリアを支配しそうになる。

「おねがい、にげて……」

ルイリアは懇願しながらメリディスを押しのける。悪魔に成り果てる自身の毒牙から遠ざけたいと理性を振り絞る。しかし、強靭な肉体に突き飛ばされた格好のメリディスは、堪えられず祭壇に打ち付けられてしまう。祭壇に供えられた供物のように横たわる大切な存在を前に、咄嗟に助けようと治癒術を試みるルイリア。

「え……？」

しかし癒しの光は顕現せず、瘴気の奔流が放たれメリディスの傷口から流れ込む。

「いや、いやぁぁぁぁっ⁉」

痛みと寒気と焼けるような熱さが同時に押し寄せ身を捩る最愛の友人。特濃の瘴気は人体に有害でしかない。メリディスの苦しむ姿が目に焼き付き、高鳴る鼓動は一層煩さを増していく。大切で何者にも代えがたい友人の叫びと涙が心地よく感じられて仕方がない。己の『人間としての心』が苦しむのがたまらなく心地よい。背徳の愉悦が甘美で快感であることを、魂に刻みつけられていく。

　ルイリアは自身の精神の変化を認知しながら、倒れた親友のもとに歩み寄る。頼もしかった親友の身体は、今のルイリアと比べれば実に貧弱だった。かぎ爪の先で優しく撫でるとじわりと溢れ出る赤い血に、胸は高鳴り背筋をゾワゾワと快感が走る。血の滴る爪をねぶれば、芳醇な鉄の香りと、幸福な美味が口に広がる。直に傷口をなめしゃぶる衝動に屈し、口に広がる錆鉄の香りに酩酊と絶頂を味わうルイリア。下腹部は灼熱のような熱を帯び、張り詰めるほど充血した陰核が徐々に太さと長さを増していく。暴れまわる背徳の快楽に、ルイリアは己の身体を止めるすべを完全に失っていた。

　親友の身体を嬲る嗜虐の快楽はとどまらず、爪を突きたて、牙を突き立て、流れる血を片端から舐めては悦に浸るルイリア。

「やめて、ルイリア…屈しないで…！」

ルイリアの心を信じ懇願するメリディスの苦悶の表情を前にして、ルイリアのどす黒い衝動はより激しく灯る。熱を帯び飛沫を上げる陰核が更に肥大化していき己の腕ほどの太さの肉竿に変貌すると、ルイリアの思考に雄の衝動が芽生えていく。メリディスの頭を押さえつけると、親友の柔らかな頬に先端を擦りつけ腰を振り始める。昇り詰める感触に視界が明滅し、瘴気に満ちた精を迸らせる。

「きもちいい……瘴気が湧き出すの、うれしくて、しあわせで、わたし、溶けちゃう……」

脈打つ灼熱の肉槍から瘴気を帯びた精液がメリディスの顔や口や身体にどろりとへばりつき濁った白に染め上げる。

「ゲホッ…おぇ……やめ、て、おねがい…るいりあ……」

大切な親友が己の精で汚されながら懇願する姿は、ルイリアに、より歪んだ愛おしさを抱か

せる。
「まだ傷が痛いんだよね…？大丈夫だよ、わたしが、全部なおしてあげるから……」
ねじ曲がってしまった慈愛と親愛の赴くままに、ルイリアは親友の身体を軽々と持ち上げ、剛直を女陰にねじ込む。
「ひっ…⁉」
「わたしの瘴気を注いであげる。強くて素敵な体になれば、もう何も痛くなくなるの。素敵な感覚でしょう？」
メリディスの最も深い所までねじ込まれた肉の剛槍は、熱と大きさを増していき、泥のように濃厚な精を解き放つ。
「ぁ…ギヒッ……！」
メリディスが激しく痙攣すると、その肉体は瘴気の侵食により変異していく。鍛えられ引き締まっていた身体は、控えめだった女性的な丸みを増していき、乳房や太ももは蠱惑的な肉感を帯びる。側頭部からはルイリアのものとよく似たねじ曲がった角が形成される。
「メリディス、とっても気持ちいいよ……！とっても素敵な身体…」
頼りになる相棒への憧れ、大切な親友への慈愛…抱いていた感情が、即物的な情動に塗りつぶされていく。蠱惑的でよく吸い付き性を貪るその肉体こそが魅力的に見えてしまう。
「ゥァァァ……キモチ、イイ…」
打ち付けられるルイリアの肉竿に、いつしかメリディスも蕩けながら腰を揺らし快楽を貪り始める。精神が屈すれば、肉体はより瘴気を受け入れ魔のモノへと傾いていく。体色は青白く変化していき、下腹部には術式陣と同じ禍々しい紋様が浮かび上がる。長く伸びた爪や発達した手足はルイリアに生じた変化に近しいが、一方で身体の大部分に人間の要素を残している。瘴気をその身に深く刻まれたメリディスは、大悪魔に隷属する眷属淫魔として身も心も染め上げられてしまっていた。
「おめでとう、メリディス…とても気持ちよくて美しい、素敵な身体に生まれ変わったね」
親友が完全に眷属へと変じたことが魔力の結びつきによって認識される。大切だったはずの存在が歪み穢れたことに、魔を解き放つ悦びがルイリアの精神の根幹に根付いていく。彼女の目元には一筋だけ涙が浮いていた。
　二人の少女がいなくなって数日後、廃砦の祭壇の間には半人半魔の魔物達がひしめいていた。彼女たちはみな恍惚の表情で、祭壇に腰掛ける一際大きな角を持った悪魔を見つめている。一体の淫魔を腰の上に侍らせ剛直を貪らせるのは、悪魔へと変じたルイリアだった存在。彼女は返り討ちにした冒険者たちを素材に魔物の軍勢を作りあげていた。
「今回の子達もとても気持ちよかったね、メリディス…」
腰を振るのに夢中で答える余裕もない親友に語りかける。自らの手で歪めた元親友の痴態に背筋がゾクゾクと震え、より堕落を広げたいという衝動が全身を駆け巡る。
「わたし、イイこと思いついたの。孤児院の皆にもわたしの瘴気をたっぷり注いであげるの。無垢な子供や優しかった先生達が生まれ変わる瞬間は、きっととても甘美で素敵なはずよ…」
絶頂に震える元親友の腰を思い切り引き寄せ精を吐き出しながら、首筋に牙を突き立て血を啜る。瘴気を放つ快楽と甘美な味わいにルイリアはうっとりと笑みを浮かべるのだった。

ふふっ…
騎士さんって
くすっ
こんなにも
弱かったんですね
安心してください
ネっ
ズボッ
シスター…
どうして
魔王様の教えを
知れば
人間なんて下等生物
やめたくなっちゃったんです
騎士さんにも
教えてあげますから
あっ♥
ヤッ♥
あッ♥
んひッ♥

辰鵜

ありがとうシスター…

騎士さんにもわかってもらって嬉しいです

ズボッ♥

ズボッ♥

人を辞めるという事がこんなにも素晴らしいとは思わなかったよ

あとは女子供に

魔王様の素晴らしさを教えるだけですね

ぐく

ぐく

すべては

魔王様のために

青き戦闘員は夜の街で淫らに微笑む

mio

地球征服を目論む悪の組織、ダークヴァンド。女性のみで構成された黒ずくめの集団は主であるヴァンドレディのレズハーレム帝国を築くため夜な夜な人間たちに襲い掛かっていた。

しかし、彼女らの悪事も順調ではなかった。聖なる力に選ばれた二人の魔法少女、スターガールズにより洗脳された人々を浄化され街の平和が保たれている。赤と青の正義のヒロインの正体が、学園の風紀委員君島青子と法能朱音であることは誰も知らない。

星の意志に力を与えられたスターガールズは今日も勇敢に悪に立ち向かう。

だが、ある日を境に青き剣士、スターブルーの消息がわからなくなってしまい、時を同じくして、学園の生徒が次々に行方不明になる事件が起きた。

そして彼女と入れ替わるように青髪の戦闘員が出没するようになったという……。

☆☆☆

秋風がより一層寒く感じられるようになったある日の夜。満月の下に灰色のコートを身に纏いマスクと眼鏡で顔を隠した一人の女が夜の街に繰り出していた。

彼女の名は柏崎美弥。スターガールズの二人が通う女子学園の体育教師で彼女らの担任だ。もちろん教え子が正義のヒロインであることは知らない。

恋人はいないが夜の店に通う趣味があり、それを月に一度の楽しみにしている。

美弥はある建物の前で歩みを止め、周囲に見知った顔がないことを確認するとポニーテールを揺らしながら小走りにその建物の中へ入っていく。

店の名前はガールズランド・レディ。

夜の街にひっそりと佇む魅惑の店に不審者と間違われてもおかしくない女性が入るも、中にいる者は誰もその素性を疑うことはなかった。

マスクと眼鏡を外し、暖房の効いた受付所で女がコートを脱いでいると店の奥から目元に仮面を着けた長髪の美女が彼女を出迎える。

「おかえりなさい。そろそろ来る頃だと思っていたわ」

「……？　ただいま、でいいのかしら？」

いつもと違う挨拶に美弥は一瞬戸惑うも新しいサービスか何かだと思いすぐさま疑問を忘れる。

不思議そうな顔をする彼女にオーナーは微笑みつつ会話を続けた。

「うふふ、中途半端な時期に来るなんて珍しいわね」

「そうなのよ。いつも月末に行ってたのに先月は行くのを忘れちゃうなんて……私ったらどうしたのかしら」

「ハロウィンの見回りで忙しかったんでしょ。それで、今日はどの娘にするの。柏木様」

客としての偽名で呼ばれるのも慣れたもので、その一言をきっかけに彼女の心は女教師、柏崎美弥から夜のオンナ柏木に変わる。

オーナーから渡されたキャストの一覧を眺めるもなかなか決められない。どの娘も可愛らしさやクールな雰囲気など目を見張るものがあり、一度も指名したことのない嬢であってもあの子もいいこの子もいいと迷った。

「一番後ろのページを見てみなさい」

「一番後ろ？　あら、この子たちの写真は？」

促されて開いたページには七人のキャストの紹介が載っていた。

しかし、誰も写真がなく黒塗りの背景にシークレットと文字が刻まれているだけ。新人であることは大きく喧伝されているが、前情報がないため余計にどんな人物かわからなかった。

「どういうこと？」

「この前入った新人ちゃんなんだけどね、ちょっとした事情で写真NGなのよ。そのぶん安くて特別コースにしてるんだけど……どう？試しにやってみない？」

「そうね、特別コースか……むむむ……いいわ。じゃあ、この真ん中のアオイちゃんでお願い」

オーナーが選んだ子なら大丈夫だろうと、正体不明の新人キャストに期待する。彼女の口ぶりからして新人も今回が初夜なのだろうと思い美弥の胸が高鳴った。

「どうも～♡　それから、いつもの部屋が空いてないからスペシャルルームになるけどいいかしら。値段はそのままだから損はさせないわ」
　滅多に入れない部屋に行けてラッキーだと思い美弥は首を縦に振る。するとオーナーは店の奥にいる誰かに声をかけその人物をこちらに呼び寄せた。
「この子に案内させるわ。あとでサービスドリンクも持って行かせるから、それまでごゆっくり～♡」
　美女に見送られ美弥は整ったショートカットとクールな目付きの少女に部屋に案内される。
　道中。知的でミステリアスな雰囲気の少女とどこかであったことがあるような気がするも他人の空似だと思いそれ以上深くは考えなかった。まさか、教え子がこんなところで働いてるなんて、そんなわけないと自分に言い聞かせる。
　案内人の無言の後ろ姿を何度も眺めている内にホテルの最上階、そこの一番奥の部屋にたどり着く。
「ではごゆっくりとお楽しみくださいませ」
　頭を下げて案内人が受付所に帰って行く。
　最後まで彼女への既視感を拭えなかったが美弥は目の前の扉を開けスペシャルルームと呼ばれる部屋に入った。
　一面ピンクの部屋に夜景を一望できるガラス窓。白いベッドの上には携帯でも弄っているのだろうか、布面積の薄いビキニを身につけた少女がこちらに背中を見せている。麗しい黒髪は腰まで伸び、お腹周りやお尻の肉から発育の良さが伺える。
「あら……もういらっしゃいましたのね」
　窓の反射で美弥に気づいた少女が若く綺麗な声を発し振り返って青い瞳をこちらに向ける。
「お待ちしておりました。柏木様。いえ、柏崎先生」
「あ、あなたは……君島さんっ⁉」
　牛ビキニに同じ柄のニーハイソックスや牛耳カチューシャを着けた爆乳の少女に美弥は目を丸くする。二重まぶたに付け睫毛した大きな眼に色っぽいメイクで妖艶に顔を彩られたオンナは自分の教え子だった。
「どうしてこんなにところいるの！　みんな心配してるのよ！」
「ふふっ、そんなことどうだっていいじゃありませんか。それにここでは君島青子ではなくアオイと呼んでくださいまし♡」
　学園で風紀を取り締まる委員長が見せる艶めかしい笑み。普段のオトナっぽさも相まって信じられないほどの色気が君島青子から感じられた。
「でも、先生にそういうシュミがあったなんて意外でしたわ」
「そ、それは……」
「まあ、そのおかげでイイ素体に仕上っているようですし……」
「何か言った？」
「いえ、お気になさらず♡　今は先生と生徒の関係を忘れて愉しみましょう♡　さ、早く裸になって……何でしたら脱がせてさしあげますわ」
「け……結構です！　自分でできます！」
　白いスーツに伸びる青子の手を払いのけ、美弥はスーツのボタンに自分の手をかける。恥ずかしそうに一つ一つボタンを外しつつ、彼女は教え子の言うことに逆らえずその通りに動いていることを不思議に思った。
（自分の生徒とするなんてイケナイに決まってるわっ！　早く止めさせないと……）
　そう思いながらもスカートを下ろしタイツを脱ぎ捨て気づけば彼女は一糸纏わぬ生まれたままの姿になっていた。
　女教師の丸裸を教え子が興味深そうに眺めている。
「先生の体、お綺麗ですね。筋肉だけじゃなくて手足のお肉も程よくムチっとしてて……生徒から人気なだけありますわね♡」
「もう……っ！　大人をからかうんじゃないの！」
「うふふ、ではお風呂場に参りましょうか」
「……っ！　え、ええ……♡」
　牛ビキニの生徒に腰に手を回され前に押されるとドキッと心臓が跳ねる音がした。
（嘘っ……私、教え子にドキドキしてるの……？　い、いいえ……君島さんのエッチな格好に驚いてるだけよ。そうに違いないわ……！）
　風呂場に敷かれていたマットにうつ伏せに

寝かされローションを体に塗られようとしていた美弥がふとある疑問を口にする。
「あなた以外の生徒もここにいるの？」
「どうしてそう思いますの？」
「なんとなく、かな……でも案内役の子やすれ違う子を見てたらそんな感じがしたの」
「……先生に隠し事はできませんわね。その通りですわ。訳あってわたくしたちはここで働いてますの」
「何があったか知らないけど、こういうことはこれで最後にしなさい。ご家族も心配されてるわ」
「それは……」
口ごもる青子に美弥が説得を続けようとすると、扉のノックが二回鳴った。ガチャリと扉が開き、明るい軽快な声が聞こえる。
「失礼しまーすっ！　ドリンクのサービスでーすっ！」
ミルク色の液体を持った逆バニーの少女が風呂場に入ってくる。その娘もまた学園の生徒だった。
「若村さん！　あなたまで……！」
「あれぇ？　お客さんってせんせぇだったんだぁ！　どう、この服似合うー？　それと、ここではワカバって呼んでぇ♡」
青子の後輩、若村咲。それから案内役の少女やすれ違った他の娘たち。女教師は彼女たちからある共通点があることに気づく。
昨日の放課後、風紀委員がある一人を除いて全員が失踪する事件が起こった。家に帰っていないどころか目撃情報が一切なくダークヴァンドによる誘拐の可能性もあると職員会議で話していたのを思い出す。
少女たちを洗脳し悪の手先に変える悪の組織の方針とこの場で起きている状況が美弥の脳内で結びつく。
「ちょうどいいところに来ましたわね。先生もお気づきのようですし、ここでネタバラシといきましょうか♡」
「はーい、アオイ先輩っ♡」
「二人とも何を……」
悪い予感に身震いする美弥にニタァ……と邪悪な笑みを作る二人の生徒。胸元に手を当て少女たちはおぞましいオーラを纏った手に魔力を込める。
「「スレイブチェンジ、ダークメタモルフォーゼっ！」」
少女らの叫びとともに動物のコス衣装がドロリと闇に溶け丸裸になる。綺麗な肌色のボディに漆黒のハイレグぴっちりスーツが装着、黒いグローブとブーツを身につけ可愛い生徒が悪の戦闘員に変身する。
目元をバイザーで隠し青子の黒髪が暗黒の輝きを放ちながら青く染め上げられると二人は名乗りを上げた。
「ダークヴァンドの忠実なるシモベ、スレイブブルー」
「同じくダークヴァンドの牝奴隷、そしてスレイブブルー様の専属スレイブ兵サキ」
ただの少女が悪の組織に関わっていることを隠しているのか、それともただのシモベに個性など要らないという意味なのか。青子と違いスレイブ兵の頭部は黒いラバーマスクで覆われ元の面影が一切なくなっている。
「あ、あなたたち……その恰好は……！」
不気味に笑い悪のコスチュームを着飾った二人に寝返りをうった美弥は驚愕した。同時に、激しい頭痛が彼女を襲い、ある記憶を呼び覚ます。
「ああッ！　お、思い出した……！　私、前にも似たようなことが……！」
それはハロウィンの夜。本当は彼女はこの店に来ていたのだ。その日の夜はオーナーが彼女の相手をしてくれた。悪の組織、ダークヴァンドのボスであるオーナーの手によって。たっぷりと体に悪の快楽を教え込まれ戦闘員に洗脳されていたのだ。
「こ、ここは……ダークヴァンドの……！」
「せんせぇが戦闘員になった時の映像こっそり隠し撮りされてたんだよ。えへへ、せんせぇ気持ちよさそうに洗脳されてたね♡」
「先生には戦闘員の素質がありますわ。先日浄化されたとはいえあのまま放っておくのは勿体ない……ですからもう一度洗脳して差し上げますわ」
「い、いや……っ！」
「拒否権はありませんわ。これはご主人様の命令なんですのよ」
急いで立ち上がろうする美弥の体をスレイブ兵が押さえつける。華奢な少女の細い腕とは

思えない強い力が体育教師を力負けさせる。パワードスーツでもある戦闘員のコスチュームのおかげで人間の数倍の身体能力を引き出しているのだ。

「サキさん、そのまま押さえつけてください。すぐに終わりますから」

「はーいっ♡」

青子が魔力を込めた指でクリトリスを摘みそこに悪の力を注ぎ込む。

「ああ……ッ、な……なにっ⁉　お腹の下が熱いっ！」

硬くなった肉刺に魔力が伝わり股間がムズムズする。下半身に違和感が生じ、それが肥大化したクリトリスのせいだと気づくのにそう時間はかからなかった。

「ひっ、ひいいいいいいいっ……⁉」

「立派なクリチンポの出来上がりですわ♡」

スレイブ兵ののしかかりが解除され自分の股間に生えた異物が正体を現す。女の器官ではなくなったクリトリス、しかしその下の女性器はそのまま残っており性別が変わったわけではない。

フタナリの者となってしまい心底怯える美弥に悪の戦闘員が語りかける。

「それでは始めましょうか。特別コース改め、ふたなり逆レイプ洗脳射精コースを♡」

「なっ……なによそれ！　そんなの知らないっ！　何もかもおかしい！」

「うるさい牝ですわね。少し大人しくなってもらいますわ……魅了（チャーム）っ！」

「あっ……♡」

バイザーを外し現れた青子の瞳が妖しく輝く。

彼女と目を合わせた途端、体から力が抜けていき美弥は考えることを放棄した。

「何もおかしいことはありませんわ。あなたはクリチンポでイクためにここへ来ましたの。これはあなたが望んだこと、洗脳される快楽をもう一度体験したくて先生が自らこうなるようお願いしましたの」

「は、はいぃ……♡　私はクリチンポでイクために来ました……また洗脳されたくてここに来ましたぁ……」

教え子の体から発せられる魅惑のフェロモンが上から漂い、自分を見下ろす彼女の爆乳ボディにムラムラさせられる。可愛い生徒はこんなにエロかったのかと性欲を刺激され巨大化したクリトリスが勃起した。

「あらあら♡　生徒に欲情するなんてどうしようもない変態教師ですわね」

「エッチで淫乱なせんせぇは私たちが気持ちよくしてあげるねー♡」

ローションを手に取りサキがヌルヌルになった右手で美弥の肉棒を掴む。シコシコと皮を上下に引っ張り哀れなエモノに未知の快楽を味わわせる。

「んぉおおおおお……ッ、なにこれぇ……♡」

巨大化したクリトリスに伝わる快感が下半身に甘い痺れを起こし美弥を身悶えさせる。

「はぁはぁ……こんな、スゴイの……っ！　あ、あそこがぁ……♡」

「あそこじゃなくてちゃんとおちんぽって言わなきゃダメだよ、せんせぇ♡」

「お、おちんぽ……おちんぽ……！　おちんぽ触られるの、イイのぉ……はぁあああああああんッ♡」

ねっとりとした手のひらにシゴかれ荒息と喘ぎ声を漏らしていると肉棒の根元から排尿にも似た別の感覚が催される。

「何か来てるぅ……おしっこじゃないのがおちんちんに昇って来てるのぉ……♡」

「えー、せんせぇ早すぎぃ～！　でも、いいよ♡　我慢しないで気持ちよくおもらししちゃおっか♡」

「あ、ああんっ……♡　で、出るぅうううう……♡」

腰をヒクヒクと痙攣させ、肉竿に溜まった快感を一気に解放する。亀頭の先端から白みが僅かに混じった少量の透明な液体が発射。射精のオーガズムで女性器からもアクメ汁を噴きこぼす。

「おほぉおおおおおんッ♡♡♡」

「精通おめでとうございます。ですが、やや早漏気味なのはいただけませんわね」

「そ、そんなこと言ったってぇ……♡」

賢者タイムでぐったりとマットの上に横たわる美弥。体全体に力が入らずぼんやりと彼女は天井を眺めていた。

（おちんぽ気持ちよかった……♡　けど、これで終わりよね……？　今日のところは見逃し

てくれるのよね……？　洗脳もされてないんだし……）

射精の反動で催眠が解け無気力に惚ける彼女だったが、股間に違和感を覚えそこに視線を向ける。

半勃ちの女根を掴み青子が勃起を維持させようと手コキを再開。さらにスレイブ兵が亀頭の上からピンクのゴムを被せていた。

「な、何してるの……？　もう終わったんでしょう⁉　早く体を元に戻して……！」

「何言ってるんですか、せんせぇ？　まだまだ時間はたっぷり残ってるんですよぉ～？」

「あと一時間はわたくしたちを愉しませてもらわないと……ねえ、先生？」

「ひぃ……っ！　誰か助け……」

「逃がすとお思いで？」

四隅の壁に魔法の楔を打ち込み、起き上がろうとする美弥の四肢を手錠で捕らえる。手錠と楔が連結し両方の手足を斜めに引っ張るとふたなりボディを大胆に広げた。

「こ、こんなことして許されると思ってるのっ⁉」

「こんなこととはどういうことですの？　恥ずかしい恰好させられて、しかもおちんぽを犯されて喜んでいることを言っていますの？　こんなふうに♡」

「はぅ……っ♡　イッ……イったばかりなのにぃ……全然ムラムラが収まらないぃ……♡」

正気を失った教え子たちに肉竿を弄られるなど恥辱的でしかないのに何故か興奮してしまう。以前、洗脳された時に、どのようなプレイをしていたか曖昧にしか覚えていないが、きっと今のようにひたすらされるがままにイカされたに違いない。

繰り返される絶頂で意識を手放し悪の手先に洗脳されたのだと直感するも美弥は自分の股間に跨ろうとする青子を退けることができなかった。

「うふふ……♡　先生の童貞、頂きますわっ♡」

「あっ……あぁッ！」

スレイブスーツの股間部が溶け青子の白い素肌が露になると彼女は美弥の肉棒を濡れた女性器で飲み込んだ。

ゴム越しに伝わる性器の生暖かさと肉膣の柔らかさが童貞だった陰茎を優しく包み込む。

「ほぉおおおおお……っ⁉　ンほおおおおおおおおおおッ⁉」

「どうですか？　ヴァンドレディ様に躾けて頂いたわたくしのトロトロおまんこ……♡」

青子が腰を下ろすと美弥の女根がすべて隠れ、破瓜せずに肉棒を淫猥に咥え込む悪のヴァギナに締め付けられる。

手コキよりも明確に、生徒と一線を超えてしまった罪悪感が湧き上がるもすぐに肉竿に与えられる快感が勝ってしまう。

避妊のためではなく生で味わえる快楽を期待させるためにわざとゴムを着けられているとも知らず、美弥はその肉膣を貪るため腰を上に突き出した。

「んくぅうううッ、はぁ……はぁ……♡　オトナをからかう悪いおまんこはぁ……ッ♡　先生が指導してあげなきゃあ……♡」

「そんなこと言って、本当はわたくしのことも『支配』したいだけなのでしょう？」

「……っ⁉　し、支配だなんてそんな酷いこと教え子にするわけ……」

「隠さなくてもいいんですのよ。先生の欲望はわかっていますわ」

「私の……欲望……？」

騎乗位で逆ピストンされながら青子の甘言に耳を傾ける。

「先生は自分に従順な生徒が欲しいだけ。良い先生でいようとか生徒に慕われたいとか……そういうのはエッチな欲望を隠すための建前、真っ赤なウソですわ！」

「ち、違……ッ、ンはぁあああぁ……♡」

「またウソを吐きましたわね。気づいていないと思っていますの？　この前洗脳された時、先生が生徒だけを襲っていましたわよね。アレこそが先生の本当の姿。生徒をスレイブ兵に洗脳して従属させるあの姿が先生の本性なのですわっ！」

肉膣で女根を刺激される度、戦闘員だった時の光景がフラッシュバックする。

補導するという名目で生徒を連れだし、彼女の目の前で外套の下に隠していたすっ裸を見せびらかす変態行為。そして怯んだところで悪のシモベとしての姿を現し彼女に襲いかかったこと。泣き叫ぶ生徒に喘ぎ声を出させ漆黒のコスチュームに変身させたこと。

あの時の快感が全身にフィードバックするかのように、背中からゾクゾクとした感触が広がっていく。

このままではまた戦闘員にされてしまいかねないと、肉膣のシゴきを耐えようと美弥が歯を食いしばるも、スレイブ兵の囁きが彼女の決意を揺らがせる。

「せんせぇの格好いいところ、見てみたいなー♡」

「……っ⁉」

「戦闘員になってスレイブ兵にシモベの見本を見せてるところ見たらきっとみんながせんせぇのこと憧れると思いますよぉ……♡」

「皆が私を……ううっ、わ……私を惑わさないで……っ！　んくぅ♡　頭……オカシクなる……ッ♡」

「いいんですよぉ♡　頭オカシクなっちゃいましょうよぉ～♡　そうだ、スレイブブルー様。悪のエナジー注ぐやつ、私がやってもいいですかぁ？」

涙を流し快楽に蕩けた喘ぎ声を喉奥で我慢する美弥の額に指を置き、今にもイビルエナジーを注入しそうなスレイブ兵が青子に許可を求める。

スレイブブルーほどではないが彼女にも微弱な洗脳エナジーを放つことができ指先にぽぅ……と妖しい輝きを放っていた。

「せっかくの機会ですわ。構いませんわよ」

「やったー♡」

「絶頂時に一気に流し込むのがコツですの。イったばかりで無防備な脳なら抵抗される心配もありませんわ」

射精したいという願望が沸々と湧きあがり秘唇に吸着される肉竿がビクビクと震えだす。教え子に逆レイプされる興奮が胸のドキドキで教え子にときめいていると錯覚させる。

「だ、ダメぇ……っ！　生徒のおまんこに中出しするなんて、こんなの……っ！」

「ふふふ……♡　残念ですが、先生は再びわたくしたちと同じダークヴァンドの仲間になって頂きますわ。さあ、理性もろとも精液を吐き出してしまいなさいっ♡」

「ほっ……ほひゅ……っ♡　ん、くぅあああああ……いっ……くぅうううううううううッ♡♡♡」

腰を下ろした拍子に肉竿が青子の子宮に到着。美弥の陰茎が白濁液を放出しゴムの先端を膨らませる。

数分前に絶頂したばかりで敏感な亀頭を快楽電流が走りブザマなアヘ顔を作らせる。

「はーい、せんせぇ～♡　大好きな悪のエナジーのお時間ですよぉ～♡」

「ほひっ♡♡♡　ああッ……ふひぃいいいいいいいいっ♡♡♡」

全身を痙攣させる美弥の額にスレイブ兵がイビルエナジーを注ぎ込む。邪悪なオーラが彼女の体を満遍なく覆いつくし、理性を排出した空っぽの脳に淫らなシモベの人格を再定着させる。

黒いモヤが青子と同じ黒いスーツの形になり美弥の体に密着し、女教師を悪の戦闘員に生まれ変わらせる。

「はひぃ……♡　スレイブドール・ミヤ、覚醒完了ぉ……♡」

「お疲れ様でした。よく似合ってますよ、先生♡」

トロンと快楽にだらけた目元に青子がバイザーを装着させると美弥の股間に跨っていた下半身をどける。

「力が溢れる……懐かしい力が……ふんっ！」

四肢に力を入れ両手を縛る手錠を引きちぎると悪の戦闘員がゆっくりと立ち上がる。肉棒に垂れ下がるピンクの精液風船が左右に揺れる。

同じ主に仕える同志に再びなれた担任を出迎える青子とスレイブ兵が彼女の覚醒を拍手で讃えた。

「おかえりなさい、せんせぇ」

「早速ですが、先生にやってもらいたいことが……♡」

「ええ、わかってるわ……♡　私に任せなさい……♡」

己の精液が溜まったゴムを腰に括り付け、スレイブドールは猥らに頬を緩ませた。

☆☆☆

同日深夜。月明かりすらない夜の街の路地裏に少女の甘い喘ぎ声が響く。

「ひゃんっ……♡　先生、もう止めてぇ……ッ

♡」

「いいえ、これは私の愛のムチなのよ！　門限を過ぎても夜遊びする悪い子は私がオシオキしなきゃいけないの！」

大量のコンドームを腰に着けた戦闘員が四つん這いになって下半身を露出させられた少女の膣穴にふたなりペニスをねじ込み、勢いよく腰を打ち付けている。

彼女の周りには今宵洗脳されたばかりの少女たちが悪のシモベを示す黒衣に身を包み戦闘員の教育現場を眺めていた。

「私の言うことを聞きなさい！　出すわよっ！　んふぅうううううううっ！」

「あぁあああぁあああああぁ～～～～～ッ！」

射精と同時に全身から発せられる洗脳エナジーを直に少女の体へ注ぎ込む。半裸の生徒を一瞬でスレイブ兵に変え大の字に横たわらせると、膣穴から肉棒を抜いた戦闘員が六個目のゴムを自分のコンドームベルトに引っかけた。

「また洗脳できたぁ……♡　これであなたも私のカワイイ生徒……♡」

「センセイ、流石ですっ♡」

「あっ、あそこにも深夜徘徊してる女子がいましたよ！　また、洗脳するところ見せてください♡」

「いひひっ……♡　まったく、手のかかる生徒ばかりなんだから……♡　待っていなさい、今先生が『特別授業』してあげるわぁ……♡」

数秒後、少女の憐れな悲鳴が夜の街にこだました。

ここに住む人間たちは誰も彼女を助けようとはない。ここら一帯が、もはやダークヴァンドの支配域なのだ。

力ずくで制服を引き裂き、半裸になった生徒をふたなりレイプするスレイブドール。その様子を青子とスレイブ兵が自慰をしながら愉しそうに観察していた。

「せんせぇ、愉しそう……♡　私も混ぜて欲しいなぁ……♡」

「わたくしもそうしたいところですが……でも、今宵はこの辺で撤退した方が良さそうですわ」

「えー？　なんでですかぁ？」

残念がるスレイブ兵に青子が北方向を指し示す。

「あちらからスターレッドが近づいてきてますわ。スターブルーが洗脳されたとも知らずに頑張る正義のヒロイン様がね」

「朱音センパイ可哀想ぉ……♡　でも、いつかセンパイも私たちと同じになれる日が来ますよね？」

「ええ。いずれ遠くない内に……わたくしとヴァンドレディ様で朱音を洗脳してみせますわ♡」

闇夜に浮かぶ正義のシルエットを眺めながら、スレイブブルーは空間を歪め悪のアジトに繋がるワープホールを作る。

地上で繰り広げられる正義と悪の戦いを一瞥するとワープホールをくぐり、青き戦闘員は長い青髪をなびかせながら微笑みとともに闇の世界へ消えていくのだった。

ぐっちー
Glow White
Progress
90%

ぐっちー

ママ
助けて
鬼ごっこはおしまいよ♥
さぁ♥私と同化して元気な子を作りましょ♥
くしゅ
ツー
私の胎内でパパにしてあげる♥
!?
斬られて…？
児童淫行は犯罪だぞ
色魔よ

妖精少女ヒバリ
あんたの命頂いたよ
不意打ち失礼
そしてサヨウナラ
大丈夫かい？少年
あ…ありがとう
ようせいのおねーちゃん
妖精少女ヒバリ
作：サッカリン秋月

今日も大活躍だな

かわいい少年も拝めたし眼福だ♪

でも君に出会えてよかったよ

あの色魔のことを言えませんよ

ひばりも大概です

ははは…ハートは手厳しいな…

戦いは大変だが感謝している

夢だったんだ変身ヒロインは…

アニメの彼女たちみたいに大層な理由はないけど…

別の顔みたいなものに憧れてね

笑えるだろう？

高3の生徒会長がそんな理由で今の生活を選んだんだ

幼稚だけど私は充実しているよ

感謝しているのは私ですよ

ひばり

あなたが幼稚だから今の私があります

自分で言ったことだがちょっと傷つくな

恥じることはありません

性癖については別ですが…

女子高生はかわいい男の子に弱いものさ

本当に襲わなければセーフ

それでまだ襲わずにいられますか

ひばり

ハートっ…

助けてくれ

今日は何度頭の中であの子を犯そうと……っ

満たされないんだ…っ

そんなものでは満たされないですよ

ワタシ達は色魔の幼生なのだから

何を言っているんだ・・・？

寄生した宿主に色魔を殺させ

その魔力を蓄える

異常な性欲は十分な魔力に体が穢された証

その魔力を持って私たちは羽化し色魔の成体となるのです

それがワタシという色魔そして妖精少女の真実です

そんな・・・

ずっとだましてきたのか？

いいえ

私はいつだってあなたの願いに従っていますよ

ギュゥ・・・

さぁ
羽化の時です

今こそ
一つになりましょう

ドクン

ドクン

ゲル…

体が熱い…

くちゅ

指がさらなる快楽を
求めて動く…

日常とは異なる別の顔がほしかっただけだ
アナタは元々善の在り方に憧れたわけではなかった
その通りだ…
別の顔が色魔に変わるだけです
さぁ身を委ねなさい
その醜悪な欲望のままに…!
そうだ…ワタシハ…

ずっとこうしたかったんだ♥
おねぇちゃんやめて！
ボクおかしくなる！
それはできないな♥
次は君のお尻に私たちの子を産卵するんだ♥
ぺろ♥
あは♥
子供ザーメン美味しい♥
私のかわいい苗床さん♥

なまはぐれ

なまはぐれ

ゲルルル…
つ…強い…
ぐゅー…
ぐゅー…
く…!!
今の私の力じゃ…駄目…!
ぐゅー…
ぐゅー…
ここは…「あの力」を使うしか…っ
龍紋起動(ディアクレスト セットアップ)…!
聖煌龍姫アルマスフィアモード：バハムート
換装(エクスチェンジ)!!

このモードは邪龍の力を使える代償に…
戦闘後に…身体が異常に疼く…ッ♡♡♡
フーッ♥
フーッ♥
フーッ♥
フーッ♥
フーッ♥
フーッ♥
まだ…っ
まだ…イけないっ…♡♡
モミュ♥
モミュ♥
ちゅー♥
ちゅー♥
ちゅー♥
ちゅー♥
ちゅー♥
ちゅー♥
ぐりぐり♥
「満足」できるまで…変身解除ができない…ッ♡♡♡

誕生！　リビダリス・マイ

つー

私は中沢麻衣。高校生。

『昨日、公園通り三丁目の路地裏にてリビダリアによるものと思われる犯罪が発生しました……』

朝のワイドショーでは毎日この話題が最初の話題として取り上げられてる。このリビダリアという組織は突然現れて街で犯罪行為を行う謎の組織。公安警察が報道上の呼び名として組織の首領の名前を便宜上組織の名称として報道しているみたい。

「麻衣、アンタも注意しなさいよ」

食事をしている横でお母さんが私にニュースのことを注意してくる。

「大丈夫だよ。姉ちゃんそういうことには縁がないから」

「光輝ったら、お姉ちゃんをバカにするものじゃありません！」

母にしかられたのは私の弟の光輝。中学校で陸上部に入っている。

「じゃあ、行ってきます」

「ほんとに注意するのよ！」

「大丈夫だよ、私繁華街とか行かないから……」

そう言って私は家を出て学校に向かった。でも、私が巻き込まれるとはそのときは思っても見なかった……。

その日は、昨日のこともあって急遽授業は午前で終了することに。さらには、部活動も臨時に休止することに。私も学校からの帰り道を一人で歩いていた。

私を見ている一団がいるとも知らずに……。

「あら？　あの子ワタシのカワイイ娘の素質を持っているじゃない……」

突然私の前に数人の女性が現れ、私を取り囲んだのです。その格好はまちまちなのだけれど雰囲気としては全員同じ感じがして怖い感じがする……。

「あなたたちは誰ですか？」

「この世界の人間が『リビダリア』と呼んでいる集団よ。ワタシはリーダーのリビダリアよ。アナタの名前を教えてちょうだい」

朝のニュースに出ていたリビダリアのリーダーが目の前にいる？　そして、私の名前を知りたがってる？

「えっと、中澤麻衣ですけど……」

なんで私なのか？　理由がわからない……。

「麻衣ちゃんね。うん、思った通りカワイイわ」

彼女から思わぬ一言が発せられた。カワイイ？　私が？

「カワイイ？　まさか、おしゃれを一切したことがない私が？」

早速その疑問をぶつけた。

「あら、アナタ、カワイイという事を解っていないわね」

「解ってない？」

カワイイを解っていない？　どういうこと？

「そう。ワタシのカワイイというのはキレイとかでは計れないものよ。アナタがアナタらしく生きている、それがワタシのカワイイという事なの」

「でも、私なんて暗いし……、メガネかけてるし……、華ないし……」

「大丈夫、アナタは気づいていないだけ。そのきっかけをアナタにあげようというの」

「……きっかけ？」

「そう、きっかけがあればアナタはもっとカワイクなれるわ」

「……もっと、カワイク？」

私はその言葉に心奪われかけました。

「そう。その代わりワタシたちの仲間になってくれる？」

「カワイクなれる……、でも犯罪者の仲間になるの……？」

もし、カワイクなれたとしても犯罪者になるのはゴメン被りたいので私は断って帰ろうとしました。

「あれ？　どこに行こうとするの？　アナタ、カワイクなりたくないの？」

「やっぱり、お断りします。じゃあ私は、これで……」

「あら？　アナタ今の立場を解っているの？」

「私の立場？」

「ワタシはね、手に入れたいものは必ず手に入れる性格なの」

そう言った彼女の目が怪しく光ると私に急

な眠気が襲ってきました。
「うっ……」
「さっきも言ったでしょ。ワタシは手に入れたいものは必ず手に入れるって。それじゃあ、ベースに連れて行ってちょうだい……」
彼女の言葉を聞きながら私は眠りにつきました。
目が覚めると私は機械で壁が埋め尽くされたSFチックな部屋にいました。
「あれ？」
手も足も動かない……、落ち着いてみると、どうも私はイスの様なモノに座らされていて、かつ両腕・両脚が拘束されています。
「目が覚めたわね、麻衣ちゃん」
目が覚めた私の前には、さっき私をさらったリビダリアさんとその仲間達が囲んでいました。
「ここはどこですか？」
私は首を動く範囲で上下左右に動かして現状を把握しようと努めます。
「ここ？　ここはアナタたちの世界とは違うところにあるワタシ達のベースよ」
「ベース……、基地という事？　でも、私が誘拐されたのを家族が知ったら警察に届け出るはず……」
「そこは心配しなくていいわ。ここでの時間とアナタたちの世界の時間の流れは別物。だから、ゆっくりしてもらって大丈夫よ」
この言葉に私は絶望するくらい落ち込んでしまいました。彼女の話はさらに続きます。
「ワタシ達はいくつもの世界を股にかけて活動しているわ。アナタの世界がちょうど百ヶ所目」
「私をどうするんですか？」
私の問いかけに、解ってるでしょと言いたげに続けて言います。
「これからアナタをワタシのカワイイ娘でありメンバーでもある『リビダリス』へと改造するわ」
「……改造？」
「大丈夫。ワタシはカワイイ娘を痛くする性格ではないから安心して。むしろ気持ちいいんだから」
痛い思いはしなくて済むけれど、気持ちいいってどういうこと？　私が疑問に思っているところに仲間の一人が私の目を隠すような何かを取り付けようとしています。
「これは何？」
「これは、アナタの頭にワタシ達の考えを書き込んでもらうための端末よ」
そう言って私にアイマスクのような装置を付けました。
彼女たちの考え方……。少し恐ろしくなりました。
「早速、まずは快楽中枢を刺激して頭の中を空っぽにしちゃいなさい！」
頭の中を空っぽに？
「了解しました。快楽中枢にアクセスします」
別の女性の声が聞こえたと同時に頭の中がほんわかしてきます。まるで温泉に浸かっているような感じです。
「ファ……」
「じゃあ、装置の挿入ね」
次に私の下腹部に何やら棒状のものが差し込まれていきます。時々その物体が前後に動いていきます。
「あ……、気持ちいぃ……」
物体が動くたびに私の中にはしびれるような感覚が襲ってきます。
「じゃあ、早速意識付けを開始よ！」
アイマスクと一体化しているヘッドホンからリビダリアの正当性や彼女に従えば気持ち良くなれることが聞こえ、それと同時に物体の動きが激しくなっていきます。
「リビダリア様は絶対……、気持ち良くなりたければ彼女に従う……」
私は、聞こえた言葉をオウムのようにただ繰り返していきます。
「私は、リビダリア様の忠実な部下『リビダリス』の一人……」
新たな情報が私に与えられ、またそれを復唱します。
「与えられた装置をヴァギナに挿入して絶頂を感じれば……」
私が彼女の手下であるリビダリスというものに変わるための方法も頭に刻み込まれていきます。
「イヤ……、でも気持ち良くなりたい……」
私は一方的に与えられた快楽に身をゆだね、彼女の下にいるのもいいかなと思い始めまし

た。
「調整は終了ね。じゃあ、麻衣ちゃん、あなたを解放するわね」
　それからしばらく経ち、私は解放されました。あまりの気持ち良さに頭の中はボーッとして心ここにあらずでした。
「どう？　麻衣ちゃん、気持ち良かったでしょ？」
　確かに気持ち良かった。もし、リビダリスになるとどんなに気持ち良いことが私を待ってるんだろうと興味がわいてきました。
「じゃあ、麻衣ちゃん早速このダリスローターを使ってリビダリスに変わって」
　そう言って彼女は機械を私に渡しました。あとで解ったのですが、ピンクローターというものと同じ形状でした。
「わかってるわね？」
「……はい。私、リビダリスに……変わります……」
　そう言って私はその機械をヴァギナに差し込むと装置のスイッチをオンにして私は言いました。
「ダリスローター……、セット……」
　オンにするのと同時に私の身体に電気のように快楽が襲います。
「……んっ。だめぇ……」
「麻衣ちゃん気持ちいいでしょ。その気持ちを爆発させるのよ！」
　さっきの教えの通りに気持ちよさを爆発させるとそのエネルギーが体内の変換装置を作動させて第一段階のセクシャルモードへの変身を行います。
「わかりました……、リビダリア様、ご覧下さい」
　それまではぼんやりとした口調でしたが、覚悟を決めるとハッキリと解放する言葉を発したのです。
「リビダリス・セクシャルモード、セットアップ！」
　この言葉で今まで以上の快楽が私を襲います。すでに意識はリビダリスのものとなっていました。私はリビダリア様に選ばれたリビダリス。この快楽に負けるわけにはいきません。
「んっ、……負けるかぁー！」
　私が絶叫すると、私の周りの風景が変わっていきます。一面機械だった部屋だったのが、ピンク色に染まっていきます。それと同時に私にも変化が訪れます。まずは、衣服が下着を含んで消えていきます。そして全裸となったところに何やら新しい衣服が身体を覆っていきます。そのすべてが何かツルツルして、着ている私も気持ち良くなります。
　そして着替え終わった私は主人であるリビダリア様に報告するのです。
「お待たせしました、リビダリア様……」
「うん、ワタシの目に間違いはないわ」
　今の私の姿を見たリビダリア様が私をほめて下さいました。
「今のアナタを教えてくれるかしら？」
「はい、リビダリア様に見初められたリビダリスナンバー１９８７」
　そう言って私は地味だった自分の象徴であるメガネを投げ捨てて生まれ変わりました。そして、あこがれたモデルのようにポーズを付けるとご主人様に今の自分を名乗ります。
「リビダリス・マイ！　ご主人様の命令により参上！」
「おめでとうナンバー１９８７、マイ。ワタシ達はアナタの誕生を祝福するわ」
　そう言われて私は深々とお辞儀をしました。
「じゃあ、今のアナタの姿を見せるわね。本当にカワイクなったわ」
　そう言って私の前には大きな姿見が現れ今の私の姿が映り込んでいました。
「……これが、私？」
　その姿とはどこぞのセーラー戦士と思わせる格好です。まずは白いセーラー服をモチーフにしたハイレグレオタード。それに水色のミニスカート。両腕にはひじまでの白い手袋。足にはモモまでの長さのニーソックス、ワンポイントに折り返しが青く染まった白のブーツを履いています。そして身体にも変化が訪れています。それまで編み込んでいた後ろ髪はほどけてウエーブがかかったようになり、アイシャドウとルージュが顔を彩っていきます。
　あまりの変わりように私は両手を顔に当てて驚きました。覆っている素材で顔に触れただけで感じてしまい、その場で自分を慰めようと股間に手を伸ばそうとします。
「待って！　まだアナタは本当のリビダリス

にはなってないわ」
　そうだ、今の姿はさらなるエナジー吸収するための姿。真のリビダリスになるための儀式が済んでないから、まだ喜ぶことが出来ないわ。
「いま、ここにエサを持ってくるわ。このエサから力をいただく（搾り取る）の」
　そう言うと他のメンバーが一人の男性を連れてきました。その姿は革製のパンツに両手両脚はそれぞれ鎖でつながれ、かつ革製の目隠しがされています。そしてその男性の首に装着されている革製の首輪には「１９８０」と刻まれた金属製のタグ。
「このエサは……、ナンバー１９８０シオリ、アナタの彼氏だったわね」
「リビダリア様、『元』彼氏です」
　エサを用意したシオリと呼ばれた女性が男性をさげすんだ目で見つめます。
「力を……、搾り取る……」
「今のアナタならその方法はわかっているはずよ。さあ、ヤルのよ！」
　そう、この男が持つエナジーを私が吸収することによって真のリビダリスへと変われるのです。
「へえ、前の彼女ではない別の女に昂奮してるんだ……」
　私はエサという存在に成り下がった男にきつく当たるようにします。そうして横になっている男のモノを手袋で上下にしごいていきます。この手袋はツルツルしていてこれに包まれたら気持ち良くならない男はいません。
「元恋人の前で、オチンチンおっきさせて……、変態よね？　そうよね、シオリ？」
　元彼女であるシオリに同意を求めると彼女も「本当ね、マイやってしまって構わないわ」と許可を得ました。
「だめ、出る……」
「出るって？　何が？」
　意地悪く男に聞きます。男は少し間を置いて「精液……」と小声で答えます。
「は？　聞こえないんだけれど……、それとあんたが出そうとしてるのは精液なんて立派なモノじゃないわ」
　しかし、私にこういう顔があるなんて……、本当にリビダリア様には感謝しかないわ。
「ザー汁よ！　私のエネルギーになるんだから」
　そう言って私はオチンチンから手を離すと今度はブーツの底で踏みつけるように攻めます。
「ふーん、手よりも足の方がいいんだぁ。立派な変態さんね」
　あとでこの行為が足コキという行為という事を知りました。
「まだ、出させないわ」
　いよいよ最終段階へと移ります。男の上にまたがるとオチンチンを子宮に挿入します。
「ん……、ふはぁ……」
　さっきの改造のおかげで痛みはなくスムーズに挿れることが出来ました。
「さあ、どれだけ我慢できるかしら？　私としてはすぐにでも出して欲しいんだけれどね……」
　私は腰をリズミカルに上下に動かしていきます。しかし、男はたった二回腰を上下しただけで「うっ！」と叫ぶと私の中に汁を流し込んだのです。
「ホント、ダメね……、シオリ？　こんなのがあなたの元彼とはね……」
「ええ、でも、うらやましいわマイ。こいつわたしでは汁出すのに時間がかかるのに、今回は挿れてすぐじゃない……、本当、うらやましいわ」
　シオリの言葉のあとにエサがはき出した汁は私の身体にしみこんでいきます。
「これが、男のエナジー……」
「マイ、ちゃんと出来たようね。じゃあ、真のリビダリスになるのよ！」
　ついに、真のリビダリスになれる……、私を見つけてくれたリビダリア様に感謝だわ……。
「では、リビダリア様ご覧下さい！　アナタの新しい娘の姿を！」
　興奮してる……、本当にリビダリア様の娘になることが出来る……。ご主人様のために力を振るうための姿に変わらないと……。
「リビダリス・バトルモード、セットアップ！」
　さっきのように今度は青紫の空間が私の周りを包み込みます。それまでまとっていたセクシャルモードのコスチュームはかき消され、再び裸になります。今度はきつく締め付けられる感じがしてこれも気持ちいい。全身をきつく締

め付けられると最後にわたしの目の前がピンク色に染まってさらなる変化は終わりました。
「今度もカワイイわ。本当マイは大当たりよ！」
今度も大きな姿見で私の格好を確認します。黒の革製ブラジャーに同じ素材のパンティー。いわゆるボンデージという格好にセーラー服の襟と紺色のミニスカート。両腕は革製のひじまでの指ぬきグローブ、足は革製のひざを超える長さのハイヒールブーツ。両耳には黒に赤のワンポイントのヘッドギア。顔を隠すためのピンクのバイザー、これが視界がピンクに染まった原因だとすぐ解りました。ウエーブかかった髪は金色に染まっています。
それはもう、今までの殻を破るかのような感じがして気持ち良かったです。
「リビダリスナンバー１９８７、リビダリス・マイ、バトルモード！」
そう言った私は力強くポーズを付け名乗りました。
「うん、それじゃあお披露目として早速お仕事開始よ！」
リビダリア様が宣言すると、周りのみんなが「ユー！」と叫んでいます。これがリビダリア式の挨拶という事はさっき刻み込まれて解っていたので私も皆と同じく「ユー！」と叫びます。
私の初陣は港町倉庫街の一つの倉庫を破壊することでした。周りのみんなは手慣れてどこを壊せば建物にダメージを与えることが出来るのか解って行動に起こします。慣れない私もシオリの手ほどきでなんとか破壊に成功。
「マイの初陣としてはいいできだったわ。じゃあ、今日の所は元に戻っていいわ」
そう言われてワタシ達は挿入していたダリスローターを取り出すと元の姿に戻っていました。私もローターを取り出すとこれまでのメガネに三つ編み姿に戻ります。
「マイ、ワタシから指令が無くてもセクシャルモードになって男からエナジーを集めていてね」
そう言ってリビダリア様はベースへと帰って行かれました。手にしたローターをカバンにしまい込んで家に帰っていきました。
そして、それからは夜にセクシャルモードに変身しては街の男を誘惑してエナジーを搾り取っていました。活動命令がないまま一週間が経ちました。今日は両親は仕事で夜遅くに帰ってくる予定。母親が用意したごはんを食べた私は自分の部屋で学校の宿題を終えると、早速ダリスローターを手にします。
「さぁて、ストレス発散に今日も変身しますか……」
最近では私はストレス発散のためにリビダリスへ変身するようになりました。しかし、この日だけは違っていたのです。
「姉ちゃん……、宿題教えて欲しいんだけれど……」
「！　光輝？」
弟に変身オナニーを見られる恥ずかしさよりも、弟を専属のエサにすれば夜な夜な街に男あさりに行かなくて済むから万事解決じゃないの、という考えが沸いてきたので早速実行に移すことにしました。
「光輝、いいよ何？」
「数学でわから……！」
そう言って部屋に入ってきた光輝を羽交い締めにしてロープでグルグルにして、ベッドに寝かせたのです。
「ね、姉ちゃん。何してるんだよ！」
「何って、ナニよ」
そう言って私は弟にまたがりダリスローターをセットします。
「ちょっと、前にバカにしたのは謝るから……」
そう言った光輝は私から目を背けます。
「いいのよ光輝、ホントのお姉ちゃんを見せてアゲル……、ダリスローター・セット……」
そう言って私はローターのスイッチをオンにするとブラジャーの上から胸、特に乳首のあたりをつまんだり引っ張ったりとローターに負けないくらいの快感を求めていきます。
「光輝、見て……　あなたのお姉ちゃんのホントの姿を。リビダリス・セクシャルモード、セットアップ……」
そう言って私はセクシャルモードに変身しました。
「ね、姉ちゃん、その格好はナニ？　美少女戦士？　コスプレ？」
「コスプレでも美少女戦士でもないわ。この間あなた、私にリビダリア様に縁がないって言ったこと覚えてる？」

数日前の朝に交わした会話を引き合いに出します。
「まさか、姉ちゃんがリビダリア？」
「少し違うわ。私はリビダリア様に見初められたリビダリス、ナンバー１９８７。リビダリス・マイよ」
「リビダリス……マイ？」
そう言って私は光輝のズボンとパンツを下ろすと光輝のオチンチンをつかみます。
「ね、姉ちゃんの手……、スベスベする……」
「そうよ、今の姿はあなたのエナジーを搾るためのもの。この手袋もレオタードもブーツやソックスもすべてエナジーを取るために特化したデザインであり素材なの……」
そう言って私が光輝のオチンチンを手袋で握るとそれは段々と大きくなっていきます。
「へえ、実の姉に攻められて、アソコおっきさせるんだ……」
「姉ちゃん、言葉遣いが変……」
今の私は男よりも上位の存在、その事が解らないのかしら……。お仕置きね。
「あんた、数日前には縁がないって言っていた、リビダリアの一員になった姉見てどうなの？何か言うことは？」
「えっと……、案外キレイになった……」
は？　案外？
「あんた、案外ってどういうことなの？」
そう言って私は生まれ変わったときみたいにオチンチンをブーツで踏み、刺激を与えます。
「ご、ごめんなさい！」
「罰よ、しばらく放置するわ、私の気が向いたらまた攻めてあげる」
そう、これはしつけ。今後、私専属のエサとして生かすためのしつけ。
「姉ちゃん……、腰が、腰が震えてくる……」
我慢できなくなったわね、あと一押ししましょう。
「光輝、今の姿の時は『姉ちゃん』ではなく、『マイ様』と呼びなさい」
どう光輝は出るかしらね……。
「わかりました！　ねえ……、じゃない。マイ様これを直して下さい！」
……堕ちたわ。
「ええ、いいわ。私は優しいもの」
そう言って私は光輝にまたがりオチンチンを挿入します。挿入された光輝は「う……」とうめきましたが私には関係ありません。
「じゃあ、光輝。まず教えてあげる。今からあなたが出そうとしてるモノはワタシ達リビダリスの力の元であるザー汁よ」
「ザー……汁？」
「そう、これが私たちにさらなる力を与えてくれるの」
更にたたみかけるわよ。
「それと、光輝？　この気持ちいいの何度でも感じていたいでしょ」
私の問いかけに光輝は素直に頷いた。
「素直でいい子ね。じゃあ、私専属のエサとして生かしてあげてもいいわよ。かまわないなら、私の中にあんたのザー汁を出しなさい！」
私が命令したと同時に光輝からエナジーが私に染みこんできた。
「よくできました。じゃあ、ご褒美に私のもう一つの姿見せてあげるわ。しっかりと見るのよ」
言われたとおりに私をじっと見る光輝。
「リビダリス・バトルモード、セットアップ」
私が変身するための言葉を放つと、私を赤紫の光が包んでいき、私を変えていきます。そして、光が収まるとバトルモードのボンデージ姿になった私が立っていました。
「あら？　またオチンチンおっきさせちゃって……、もう一度したいの？」
私の問いかけに首を縦に振る光輝。
「だーめ、これからあなたをリビダリア様に専属エサ認定してもらうんだから」
私がそう言うと、リビダリア様が現れました。
「早速、彼をマイの専属に登録するわね。じゃあ、これが彼の首輪よ」
そう言って、金属板に私のナンバー「１９８７」が刻印された首輪を渡されました。私はそれを光輝の首に絞めます。これで、彼は私の専属のエサとなりました。これからは効率的にエナジーの補給ができるようになりました。
「それじゃあ、彼をエサの姿にする方法を教えるわね」
リビダリア様から教えられた方法を実行に移すことにします。まずは、彼の首に付けられた首輪の刻印部分を触りながら「マイスレイブ、セットアップ」と唱えると光輝の着ていた服はかき消され全裸の姿に。そのあと革製のパンツ

と目隠しが装着されて初めて私の専属エサである姿に変わりました。
「ねえ……、マイ様ぁ……、ザー汁出したいのですが……」
「我慢なさい！　畏れ多くもリビダリア様の前よ！」
早速汁を出したがっているエサである弟を見たリビダリア様は「彼は有望ね」とほめて下さいました。
そして、ある日の朝。
今日もリビダリアの破壊活動のニュースが放送されると、お母さんは今日も「あんたは注意しなさいよ」とまた話しかけます。そこに、光輝が遅れて起きてきました。
「マイ……、じゃなかった。姉さんおはよう……」
途中「マイ様」と言いそうになった弟をにらみつけたことを察して姉さんと言い直すあたりカワイイ弟ね。今度指導してくれたシオリとエサの交換しようかしら……。
「物騒だから、あんた達大通りを歩いて帰ってきなさいね」
お母さん大丈夫だよ。だって、私そのメンバーの一人だもの……。

ぱら☆ろす

生まれ持った稀血の力で悪を祓う女子高生剣士狭間玲。

だが卑怯な罠にはまって怪しい宗教団に囚われてしまった。

くっ何をするつもりだ貴様！
いやぁせっかくなので発掘した鎧の部品になってもらおうかと

ぐうっ！？
こ…こんなことしても無駄なんだから…！
ばら☆ろす

――がっ！？
耐えるのはいいけど君はただの部品だからね
これからはその鎧のバッテリーとして生きてもらうよ

あとがき

A 全年齢向けに参加　B 成人向けに参加

あおさきけい

B

はじめまして、合同初参加のあおさきけいです。今回は普段から得意な艦船擬人化ものにファンタジーもの+「因幡の白兎」の故事+「戦艦ポチョムキン」ネタ(プロパガンダもの)+カルト宗教+悪堕ちものを足して分量を1/3程度にしたらこうなりました。

いなづまこと

B

いなづまことでございます。
前回は二次創作でしたが今回はオリジナル作品で参加いたしました。
この本で悪堕ちの琴線に触れ新たな同志が多数輩出されればとても喜ばしいことですね！

ak

B

ａｋです。初めての同人作品として投稿しました。現在は表と裏の顔をしながら執筆活動をしています。昔のダイナレンジャーやジャスティスブレイドなどの影響を受けています。
同じ名前で悪堕ち作品を書いています。

緒嵜

B

緒嵜と申します。前回の合同誌企画に続き、今回も素敵な企画にお邪魔させていただきました！
「悪堕ち」というと色々な形があると思いますが、個人的にはその中でも「登場人物の想いや善意」が利用されたり歪められたりする感じの展開が大変好みです。
今回その一つが描けたかなと思います。
4ページと短めなうえに直接的なえっち描写は少なめではありますが、是非楽しんでいただけますと幸いです！

ぐっちー

A B

全年齢向けの方にもいました、ぐっちーです。好きな洗脳シーンは耳クチュみたいな脳を直接改造するタイプの洗脳です！交尾シーン描いた方がよかったかなって思ったんですけど…男描くのキライなので、薄い衣装にさせてもらいました。ご主人様に媚びるシーンはまた今度(？)

サッカリン秋月

B

サッカリン秋月です。
この度は合同誌へ参加させていただきありがとうございます。
悪堕ちの「ここ好き」全部詰め込みたいですが削らざるを得ないのが悲しいところですね。
普段は東方悪堕ちやSSなど作成していますのでよかったら眺めてください。
Twitter@nekozenaamatou

辰鵜

B

連鎖堕ちいいよね…
広がれ悪堕ちの輪

つー

A B

つーです。成年向けで書いてみましたけれどいかがだったでしょうか？　キャラデザインなどはｐｉｘｉｖに掲載しますのでそちらもお楽しみに。

投職

A B

成人版は初挑戦の投職です！
試行錯誤の連続でしたが良い堕ち物が完成しました！やったー！
全年齢版２の続きでヤマリットと一つになった後のお話です。
姿が違いますがそれは一人の身体を再現し騙すため。エロいよね！

浪花道またたび

B

「お前の悪堕ちを見せてみろ！」と言われたので、悪堕ちの中でも個人的にアツい「堕ち名残」を描かせていただきました。
4ページなので爆速で堕として爆速で堕ち名残らせました。
堕ち名残もっと流行れ！

なまはぐれ

A B

今度出す（はずの）狐耳のじゃロリ娘が恋愛した後エロエロされて寝取られ悪堕ち。
触手召喚して気に入らない奴を餌にしたりする同人誌のヒロインを描かせて頂きました。
楽しんでいただければ幸いです。

波多野奈津目

A B

TS悪堕ちは最高だぜー、ということで、ぐっちゃぐっちゃになってもらいました。
公衆の目の前で羞恥女体化凌辱と怪人化の末受け入れ苗床化しましたが、それでも童貞非喪失なのは単なる趣味です。

ぱら☆ろす

B

悪堕ち合同２発行おめでとうございます！
pixivやDLsiteで活動中のサークルPARADISE-LOSTの
管理人のぱら☆ろすです！
初オリジナルで大分苦戦しましたがよろしくお願いします
Twitter：@oV1Pl7Uf1Rcj5Yj

八月一日冬至

B

はじめましての方もそうでない方もこんにちは。
八月一日冬至（ほずみとうじ）と申します。
悪堕ち合同誌第二弾という事で、前回に引き続き参加させていただきました！
百合！触手！魔物化！等々、とりあえず自分の悪堕ち世界を構成する基本元素を
ふんだんに詰め込んで描かせていただきました♪
この一冊を切っ掛けにして悪堕ちの深い闇に堕ちていく人間が
一人でも増える事を願っております！

魔法屋

B

どうも、魔法屋です。
実は末期戦ものとか結構好きです。ガンパレとかＥＧコンバットとか。
あと、刀剣乱舞って文字並べ変えたら絢爛舞踏になることに気付いて、ちょっとテンション上がりました。（悪堕ち関係ねえ）

mio

A B

牛ビキニを上手く活かせなかったのが心残りのmioです。悪堕ちコスとは別に、人間状態でも悪堕ちを匂わせるコスがあるといいですよね。今回は出番がありませんでしたが裏設定でエロ改造制服が風紀委員に支給されています。

離宮

B

初めまして。離宮と申します。最近書き始めた若輩の身で、錚々たるメンツの中で作品を書かせていただけて、大変感謝しております。少しでも悪堕ちとTFの食い合わせの良さを布教できたら幸いです。

本誌を手にとっていただき、誠にありがとうございます。
悪堕研究機構代表の緋風より御礼申し上げます。
初めての方も、以前より御贔屓の方も、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

今回の悪堕ち合同企画では、全年齢向け冊子と成人向け冊子の2冊を作成することになり、本誌は成人向けとなります。
本誌の参加者は、いなづまこと様の作品の挿絵を描かれた常時紅蓮様を含め18名で、
企画全体としては私を含め総勢36名が参加する企画となりました。
※両冊子に参加されている方がいらっしゃるため総数は単純合算ではございません

実は悪堕研究機構から成人向けの冊子を出すのは7年ぶりのことです。
機関誌を含め、基本的に全年齢向けの冊子を作成している悪堕研究機構としては、2冊同時作成も含め、
今回の企画は特別なものとなりました。

今回は緒嵜様に素敵な表紙イラストを描いていただきました。
依頼を快く引き受けていただいた緒嵜様に厚く御礼を申し上げます。

全年齢向け冊子（2A）と成人向け冊子（2B）の表紙は2冊でセットとなるような構成となっております。
題材となったキャラクターたちは、現在、別途進行中の変身ヒロイン企画に登場するキャラクターたちで、
本誌の表紙の左がアプリコット、右がネモフィラという名前です。
本誌では既に堕ちてしまっているアプリコットがネモフィラを堕とす構図になっていますが、
変身ヒロイン企画の本編とは全く無関係の展開として緒嵜様にお願いしました。
本編ではアプリコットからネモフィラへの連鎖堕ちがあるかもしれませんし、違う展開かもしれません。
変身ヒロイン企画をお楽しみにお待ちいただければ幸いです。

ちなみに、目次と本ページ背後のイラストも彼女たちの連鎖堕ちを題材としていることに気づきましたか？
表紙と裏表紙とは違った緒嵜様の悪堕ちイラストを堪能いただければ幸いです。

次回もまた、皆様に楽しんでいただけるような企画を提供できればと思っております。
それでは、次の企画で再び皆様にお会いできることを心待ちにしております。

悪堕研究機構　代表　緋風

悪堕研究機構悪堕ち合同2
悪堕ち合同誌『悪堕ちファンブック2B』（電子版）

発行日　2021年12月31日（冊子版）
2022年8月15日（電子版）
発行者　悪堕研究機構
編集者　緋風（悪堕研究機構）

悪堕研究機構　代表　緋風
メール　akuochiorg@gmail.com
Twitter　@utakuochi
公式サイト　akuochi.com

本誌の無断での転載・複製を禁じます。御連絡はメールアドレス宛にお願いします。

参加者一覧（敬称略）

あおさきけい
いなづまこと
ak
緒嵜
ぐっちー
サッカリン秋月
辰鵜
つー
投職
浪花道またたび
なまはぐれ
波多野奈津目
ぱら☆ろす
八月一日冬至
魔法屋
mio
離宮